明治三十八年一月二十五日發行

（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百八拾貳號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百八拾二號　目次

謹賀新年
併せて會員諸氏の健康を祈る
私立大日本婦人衛生會

併せて會員諸姉の益々健全ならんことを祈る
一月元日
新潟賛成員 本山捨次郎

新年の御壽目出度祝ひ納め候
三十八年一月一日
甲府市横近習町 川上喜ん子

謹て新年を祝し參らす
三十八年一月一日
熊本縣八代町 吉富霜子

新年を賀す
一月六日
宇品港 岡宮かめ

緑かわらぬ常盤木の御壽五洲も同じ御事に存じ候御會ます／＼御榮え若葉の春へ御超歳遊ばされ御目出度存じ上候先は初春の御祝儀まで目出

謹賀新禧
本年は實に重ね／＼御目出度ことの極みに候御互私共は實に實に幸福なる國民にてはございませんか其後ます／＼富國强兵ならしむるはとりわけ婦人の衛生に大なる關係のあることとぞんじます幸ひこの衛生會は皇族殿下を會長に頂き其の下に熱誠なる會員の方々の御勤務には必要有益なる衛生講話を御披露下されまことに有がたく御禮申上ます嗚呼かましけれど此後ます／＼此會の進歩と隆盛とを祈ります
長野縣松代有樂町 堀雪野

新玉の年を目出度祝し申候
一月八日
甲府緑町四〇 内藤喜千彌子

以下畧之

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんこと誰ともに希はざるはあらずされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〱衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして我等婦人のもつぱら學ぶべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相謀て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは實に喜ばしきことなりされども其の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き智識經驗ある人々を招請して衛生上諸般の談話演說談話を聽き互に相研究し又之を雜記して冊子に編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに資すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふくこと爾かり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則

（明治廿二年十二月改正）

●第一章　目的

第一條　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ以て社會全般の幸福を増進するにあり

●第二章　名稱位置

第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三章　會員

第三條　本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會するを得

第四條　入會の者は姓名族籍住所及會員の者續を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付すべし（交付手續は本則に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返却せず

●第四章　役員

第九條　本會に推薦員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の姫殿下に願出るものとす

第十條　本會に左の役員を置く

會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

第十一條 [illegible]

[illegible]

第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

第廿八條　支會に加入したる本會々員に配付すべき本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●第八章　雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し毎會に於ける衛生上講話演說談話等の筆記及內外選報本會の諸報告等を揭け之を會員に配付すべし支會の報告あるとき又同じ

第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を雜誌に登錄し尙

本會雜誌を以て報告すべし第卅二條 會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）第卅三條 會費は東京府下に限り毎月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麴町飯田橋通宛）振出しあるべし第卅四條 會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

第卅五條 本規則は會長の意見又は會員二十名以上の贊成に依り總會の決議を經るに非ざれば之を更正することを得ず

事務所 東京市麴町區飯田町六丁目三番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃 周子殿下

會長 侯爵夫人 鍋島榮子

副會長 濵尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
仝 羽田三統子
仝 岡田德子
仝 高木かう子
仝 山本多穗子
仝 松平芳子
仝 三浦教子

評議員 伊集院しげ子
仝 石川貞子
仝 濵田捨子
仝 仁禮壽賀子
仝 四條升子
仝 穗積歌子
仝 緒方悅子
仝 岡山とし子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山鐵子
仝 子爵夫人 田中いよ子
仝 丹波貞子
仝 高橋孝子
仝 田村きよ子
仝 相馬隆子
仝 男爵夫人 南部照子
仝 中濵芳子
仝 伯爵夫人 松平充子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 子爵夫人 松平久子
仝 木場小ゆり子
仝 岸逵子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別贊成員

（●は本會及支會に於て講演せられし諸氏）

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學士 ●伊東祐彦君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
[illegible] ●岩井禎造君
醫學士 石原久君
貴族院議員 濵尾新君
醫學博士 ●濵田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 萩原瀾四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
●長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 小原頼之君
醫學士 ●林春雄君
醫學士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君

歩兵中佐 ●堀内文次郎君
醫學博士 ●土肥慶藏君
醫學博士 ●岡田和一郎君
醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩山正信君
醫學士 若杉喜三郎君
男爵 ●加藤弘之君
ドクトル ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 ●川上[illegible]武君
醫學博士 ●金杉英五郎君
醫學士 ●笠原光興君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寛君
法學博士 高木豐三君
醫學博士 ●田代義德君
新潟 ●田代亮助君
男爵 高崎正風君
醫學士 竹中成憲君
醫學士 ●高田耕安君
[illegible] ●高橋辰五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋良碩君
藥學博士 ●田原良純君
醫學士 ●田村光顯君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 米山本郎君
三等軍醫正 ●星野俊光君
醫學士 ●宮本叔君
一等軍醫 ●樋井忠殷君

大日本敎育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部瑯男君
理學博士 藥學博士 ●長井長義君
醫學博士 ●中濵東一郎君
醫學士 栗本術務君
海軍中佐 ●小笠原長生君
醫學士 村松秋三君
醫學博士 ●殿川宗雄君
醫學博士 ●栗本東明君
醫學士 ●山田鐵三君
醫學士 ●山田弘倫君
醫學士 ●山根正次君
岡山 山川粹二君
醫學士 ●丸茂文良君
衛生試驗所技手 ●丸山是四郎君
ドクトル ●松山陽太郎君
ドクトル ●小此木信六郎君
盲啞學校長 ●小西信八君
廣島 小泉貫君
醫學士 ●古川榮君
東京 布施正節君
臺灣民政局長 ●後藤新平君
帝國大學教授 ●エ、ベルツ君
醫學士 ●甲野棐君
文部視學官 ●寺田勇吉君
子爵 秋元興朝君
前軍醫總監 ●足立寛君
ドクトル ●新井古芳君
ドクトル 富士川游君
高崎醫會長 土谷全次君
產科婦人科 ●水京龜君
ドクトル ●久保田誠感君

醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 ●淺田決君
醫學博士 ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山義六君
高崎 秋田聰太郎君
醫學博士 佐藤三吉君
醫學士 ●櫻井郁二郎君
醫學士 ●佐藤恆久君
ドクトル 佐伯理一郎君
醫學博士 ●榊順次郎君
醫學士 ●榊保三郎君
醫學士 櫻井恆次郎君
醫學博士 ●桐淵鏡次君
醫學士 ●北村梢造君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學博士 ●木下正中君
醫學士 ●北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●箕作佳吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學博士 ●三輪信太郎君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●須田卓爾君
●ミスヒユース
醫學博士 森林太郎君
醫學士 ●笹川三男三君
醫學士 ●波多野惇君
醫學博士 ●吳秀三君
醫學士 簗瀬雄一君

名家演壇

戰時に於ける女子の體育に就て

下田歌子女史演說
佃速記事務所員速記

私は戰時の女子の體育に付て御話を申しますと申上げましたが、私は體操の專門家ではありませぬし、又醫家、衛生家と云ふてもありませぬから、たゞ教育の範圍なる體育に就いて、否寧ろかゝる時節に際しては、益々女子の身體を健强にしたいと望むところから、聊か所思の片端を陳べて見ようと存じますのでございます、抑も、體育と云ふものと心育と云ふものとの關係は段々生理や心理或は哲理の研究が進むに從ひまして非常に密接であると云ふことを此頃大分世の中に唱へられて來ました、それは如何にもさうであらうと自分が直接に教育に關係して居りまして考へたことなどがございますで、それを主に御話を致したいと思ふのでございます。

時局のことに付て實際の有様を御話申して見まするに、私が嘗て外國に參りましたのは未だ日清戰爭の形跡も見えませぬ前のことでございました、其頃は唯僅かにどうも日本人の身體が武家隆盛時代よりも悪くなつた、確かに悪くなつたと云ふことを教育の當路者などが非常に心配されて居ましてどうにかせにやならぬと云ふ聲が少し聞え始めた時分でございました、然し其頃はまだ女學校などには今日のやうに運動などゝ云ふとも體操などゝ云ふことも隆盛を極めませぬでした、それから三年ばかり經つて歸つて見ますと云ふと、方々の女學校に運動會などの催しがありましてさうして盛に女子の體育奬勵が大に顯著になつて來たやうに思ひましたのです、それが

強ち日清戰爭のみが影響したと云ふ譯ではなかつたのでございませうが、併し或一部分は確かに刺激されてあつたものであらうと思ひます、それから今度又日露の戰爭になりまして、さア戰爭になつたから愈々體育を奬勵しなければならぬと云ふまでのこともないのでございませうが、妙なものでありまして、世の中は何となく殺氣を含み、社會は總體活氣を生じて來ると同時に、人の心の傾きが體操でも盛にすると云ふ方に段々なつて來る現象は確かにあるのでございます、それで又戰時になりますると、體育を盛にしてどうしても身體の健康を益々增進しなければならぬと云ふことは、人が實際に付て甚しく此事を感ずるであらうと思ひます、それは段々此節婦人方などが間接のみならず直接に軍國のために御盡しになりまして甚だ盛であることは、今度の戰爭に於て軍人方の立派な御手柄が社會に聞えて世界各國の人が稱賛すると同時に大に喜ぶべく誇るべきことであらうと思ひます、然るに若しも戰爭には強かつたけれども日本の婦人は眠つて居つて何にも御手傳をしなかつたと云ふならば隨分私共は肩身の狹いことでございませうが、今日此處に御臨席になつて入らつしやいます鍋島侯爵夫人などは篤志看護婦會長で入らつしやいますから、實にこれ日も足らないやうに朝も早く夜も夕方になるまでも會務の爲及び傷病兵などのために御いたづきになりますと云ふやうなことで誠にあらまほしき善事であります。偖て軍國の事について、平素公共のことに御盡しになつて始終戶外に御出掛けになる御婦人方などは單に赤十字社事業ばかりでない種々の方面にも御働きになりますが幾らでも御續きになる、健康を保つて毎日のやうに御働き下さるが、それでも御病氣が出るとか御疲勞が出るとか云ふことはさうありませぬが、平素些つとも出なかつた方、平時に何もなさいませぬだつた方は御氣の毒なことには精神だけは軍國のために盡したいと思つて居られても御身體が續きませぬ、一週間や二週間は續いても二ヶ月

三ヶ月半年一年となると殘念ながら續きませぬ、それも今少し練習なさいましたら宜くなりませうが、急に無理なことをしては疲勞が來ると云ふことはどうしても免れませぬ、それでありますからどうも身體が惡くつては仕方がない、身體を丈夫にしなければならぬと云ふことが今日では御婦人方の御考にも愈々度を高めまして、私が直接に關係して居りますことなどにも其愛女の母御とか云ふやうな御方の御考が著く體育に重きを置かれたやうでございます、ちよつと一例を言ひますと、體操などでございますとどうもあゝ云ふことは危いだらう、あゝ云ふことは餘りお轉婆になりはしないかと云ふやうな恐れを抱かれたやうな方々も今年になるとスッパリ其聲が聞えませぬで、自分の考ではどうも身體が十分にないから子供は健康にしなければならぬと云ふ聲は確かに聞きます、さうなつて來ると成程是は身體が丈夫であつて自分の精神の指揮通りに身體を動かすことが出來なければならぬと云ふことが一般の日本女子の頭にも段々分つて來るのであらうと思ふのでございます、夫故に東京は素より各地の女學校の模様を聞きましても、どうしても體操はモッと盛にしなければならぬ、モット體育は進めなければならぬと云ふことが益々聲を高められて參りますと云ふことでございまして、是は甚だ結構なことでございます、前にも申しましたやうに如何にも武家執政時代は一般とは申されませぬだつたが、其中流に位して即ち日本國の腦髓となつて國家の消長に關係した所の武家と云ふものには存外體育が出來て居つた、それは又身體を宜くしやうと云ふことも ありました、武士は身體を鍛へなければならぬと云つて勵んだと云ふこともありましたが、或技術を宜くして其爲に出世が出來ると云ふやうな種々の點から致しまして武藝と云ふものを勵みましたから、これも或一部分であつたかも知れませぬけれども女子にも武術を奬勵した藩では、女子にも隨分立派な身體が出來て居つたやうでございます、併し太平が久しく續き

ましたけれども戰國時代に遠からぬ時分程女子の武藝と云ふやうなことは甚だ少なくなつて居りましたけれども或藩に於ては決して廢して居らなかつた、或は薙刀を習ふとか小太刀を習ふとか馬に乘ると云ふやうなこともして居つた、一體國家と い ふものは、總ての人民の活氣が消えて仕舞つた時には、其國は亡びる秋である、一般人民の活氣が何處までも滿ち〳〵た時は、其國の非常に強くなる時、非常に起る時である、其活氣が或部分に脈々とでも殘つて居れば、決して其國は亡びないが、全く無くなつて仕舞ふと亡びるのです、是は歷史を學んだ御方は例を引くまでもない、御承知のことである、日本などは幸のことに、隨分德川家の太平が三百年近く續いたと云ふので、或部分は非常に腐りました、活氣はまるで無くなつて仕舞ひましたけれども、或部分には殘つて居つた、其或部分に殘つて居つた活氣が、維新の光りと共に大變膨脹をしまして、日本全國を掩ひましたから、今日の如く國家は非常に強くなり、戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取ると云ふやうなことで、非常な恐ろしい國民である、非常な行爲の國家であると言はれるやうになつたのは、我國の活氣が未だ死切らなくつて、今日に至つてそれが膨脹したからであるのである、で、個人身體の強さも或部分までは、進ますれば進んで參るものでございますから、益々體育と云ふことに重きを置きまして、さうして立派に身體を練磨しなければなりませぬが、私の今日申上げたいと云ふのは、其體育は心育と最も近い關係を有つて居つて、此兩者が相竝んで進まなければ、斯の如く大切な斯の如く增進を望む所の體育も存外役に立たぬものであると云ふことを御話を申して見たいと思ひます」。

それは、或時代に於きましては、宗教家の非常に信じて居りました所の、殆ど靈界と云ふもの丶目的を打毀した時代がございました、それは西洋に於て物質界で進歩して、總て此物體の上に現はれた所の極く算用に合つて、四を二で割れば二が出ると云ふや

うに極りきつた物體上に現はれたものでなければ、モウ信ずることは出來ないと云ふまでに、或物質界の非常に進歩した時代がある、其時代には、殆ど一方の靈界の研究者は聲を潜めて仕舞ひはしないかと云つた時代もありましたが、世の中の事と云ふものは、なか〳〵特別な優れた人が、特別な深い高い智惠を以て、學理上研究を致しましても、是が確かな道であるとか、是は確かな理屈であるなど丶云ふことは言はれないものでありまして、化學が甚だ長足の進歩を以て、膨脹して居りますにも拘りませず、今日、二十世紀に於きまして物質界の益々進歩するにも係らず、それ以外に恐るべき、靈界の發達進歩をも現象した。

まだ二十世紀の人間の智惠を以ては測量し難い程の高い遠い所のものがあると云ふことを、御承知の通り、此頃、宗教家以外の學者も言出して來ました、それと同時に、醫學が非常に進歩した結果、肉體と精神との關係は、非常な妙不思議なものであつて、之を研究して之を進めなければ、本統の治療が出來ないと云ふことを言出して參りました、此頃になりますと肉體に病氣があつても、肉體を療治するだけでは其病氣は全快しない、或部分までは治療が出來ますけれども、全く治療の出來ないことがある、それはどう云ふ治療をするかと云ふと精神を治療しなければならぬ、精神の病を拔去らなければ肉體の病を癒すことは出來ないと云ふことを、確かに今度は醫家の方から言出して參りました、さうすると、此物質界の研究に飽きて、再び立歸つて靈魂界の研究をする所のがはの學者の說と、今度は非常に近く結付きまして、種々の證據立をして、之を論爭するやうになりました、それで近く獨逸などから歸つて參りました御醫者の、或方などは大附催眠術と云ふものを信じて、彼の眠りと云ふものを以て、人間の精神を休めて仕舞ひ休息をさして仕舞つて、それから精神の病を癒して、其上で肉體の病を癒す治療をしなければならぬと云ふことを、非常に唱へる人もござ

います、併し是も十が十まで必ずしもさうであるとは言はれますまいが、此說もなかく無視することは出來ないと思ひます、近い例を申しますと、能く御老年の方が御話がございますが、彼の黑船が來たと云つて騷ぎまして、外國の船が來まして、なかく嚴しい談判を受けました、貿易を始めよ交際を開け、さもなければ戰端を啓くかと云つて迫られました、維新前に長州とも少し戰をし、薩州とも少し戰ひましたが、其時に鹿兒島の海岸を外國の軍艦からして砲撃せられました、其時には皆肺病患者が癒つた、皆な癒つて仕舞つた、斯う云ふことをあの時分の方が言はれます、それは私共は子供の時に嘘だらうと思ひました、そんなことはない氣の爲だらうと云ふやうなことを言つて居りました、所が、どうも今の肉體の病を治すにはまづ精神の病を治さなければならぬ、體育と心育とは非常な密接な關係があるなど丶云ふ說が果して眞なりとすれば、それは惡くなつて仕舞つた肺の部分は良くなりもしますまいが、段々惡くなつて來るのが、或部分で止つたと云ふやうなことはあつたかも知れませぬと思ひます、それから自分が直接に取扱つて居りまする所の生徒に付て見ましても、氣力の極く確かな子供であつて、一向神經質でない物に頓着しないと云ふ人は、餘程病氣が惡いと思つて居りましても早く癒ります、然るに神經質の極く心に懸ける人、極く氣の弱い人や氣の引立たない人、斯う云ふ人が病氣になると甚だ遲く癒ります、それから又掛つて居る御醫者を非常に信じて屹とあの方に願つたら癒ると思はれて居る病人は、確かに早く癒ります、又其御醫者さんに就て聞いて見ても確かにさうであると言はれます、信仰と云ふものが作つて、非常に早く治療が屆くのです、それからどんな良い御醫者でもあの人は信じない嫌だと思つてると、どんな看護婦が附いて間違ないやうに藥を服せしめてもどうも癒りが遲い、是も御醫者に就て確めると確かにさうであると言はれる、さうすると成程體育と心育と云ふもの

は、餘程密接の關係を有つて居ると云ふことが分るのであります、茲に於て、體育を益々盛にして、どうか立派な身體を拵へやうと云ふには、此精神教育即ち心育に餘程注意して進めなければならないだらうと思ひます。

それで、體育に付てちよつと一例を御話しまする と、私の知つて居りまする生徒の中でも、身體の弱い人は、自然不活潑でございますから體操などは嫌ひです、嫌ひなものを學校で勵行して嫌々ながらそれをさせる、其嫌々さした體操は何の役にも立たないのみならず、體操を致して居る所を見まする と、些つとも精神が手足の端まで這入つて居りませぬ、體操の教師は、これを戒しめまして、それでは些つとも精神が這入つて居らないから、血の循環が付かないと云ふことを言ひます、それが此頃一般の女生徒が、段々丈夫になつて來ると同時に、大層活潑になつた、女の子の心が活潑になりますと、それと同時に其體操をして居る所を見ますと、其動かす所の手にも足にも確かに精神が這入つて居ると思ひます、それであるから、病氣の如きでも、精神が病氣をしないやうに、精神を健全にして、始めて肉體の病氣も能く癒ると云ふことになるのです。

それから今度は、心育の方を肉體の方から助けて貰れる、西語に健康の身體には健康の精神が宿るとある。どの位心配のことがあつても、身體が達者であれば同じ心配でも其心配が身體に障るとが少ない。確かに身體が丈夫であれば、精神教育も非常に助けられまして、益々宜くなる、心育を施さうとするにも身體の宜い人ならば施し易い、叱つても心配がない、泣くやうなことがあつても身體にさはらないと云ふことならば、思切つて精神の悪い所を癒すことが出來る、それで心育を主る所の者から言つても、身體が丈夫であれば誠に都合が宜いから、體育を十分にして貰ひたい、又體育を司る方から言へば、精神の確か人なれば誠に都合が好い、出來るだけ體育を施して意の如く運動をさせること が出來る、

病氣をしても直ぐ癒すことが出來ると云ふのでありますから此心育と體育とは相伴つて行かなければならぬものでありませう。

で、身體を丈夫にしやうと云ふ人は、精神教育も勤めなければならぬ、精神教育に力を盡せば身體が丈夫になる、身體の丈夫なる人は精神教育を思切つてすることが出來るから誠に都合が宜い、兩方相俟つて益々此增進を計らなければなりますまいと思ひます、其他一例を申しまするど、日本の軍隊が強いと云ふことは、モウ今世界各國で爭ふべからざることゝなつた、然るに、日本の兵士の身體は どうである、露西亞の兵に較べて小さいのです、小さければ必ず貫目も少ないに違ひない、其小さくつて輕い所の物體の上から言へば劣つて居る 其劣つてる兵士が、優つて居るところの兵士よりも強いと云ふことは何であるかと云へば、精神が健全である、精神が弱者でない、其弱者でないのは何の滋養分を以て、斯の如く精神の虛弱でない所の軍人が作られたであらうかと云ふと、其精神の滋養分は、決して一朝一夕に與へられた滋養分ではなかつた、元來日本の建國の體が他國と異つて居るからして、皆さんも御承知の如く、私共の先祖を御治めになつた所の今の天皇陛下の御先祖樣が 私共日本國民を御覽なさることが臣下と云ふよりも寧ろ愛兒のやうにあらせられた、恰度一家の人のやうな君臣の情義が、歷代之を積重ねて離れられないやうな、忠君愛國の形を作て參りました、尤も中には此道が進み或は退いた時代もありまして、良くない國民も出來ましたけれども、併ながらそれは八田翁の詠まれた如く

　幾そたびかき濁してもすみ返る
　　水や御國のすがたなるらむ

て、今日まで一治一亂と種々の時代を經過しても、猶ほ段々忠君愛國の精神を打固めまして、維新後には、大層世界の文明の空氣が靡然として內地を吹廻しそれに付ては、私共が非常な幸福を得た と同時に、古くからあつた所の忠君愛國の根を動かしたと

云ふやうな傾きもあつて、一時は教育界の人などは、是は修身の定義が變りはしないか、或は變つた方が宜くはないか知らぬと云ふやうな說も出た程で、種々に動きました、一體人間が疑ふと云ふ心の起る程損はない、信仰と云ふものが堅ければ、根が深くなつて宜い、疑が出來ると根が動く、然るに日本の修身の基礎は可不可如何と云ふやうに疑つて來た、さう疑つたものですから、多少動いた、それは、日本人の精神教育が衰へはしないかと云ふことを皆な心配をして參りました、だから、口癖にもどうも德育は不十分であるとか、德義が衰へたと云ふ聲が澤山社會に聞えて、新聞などでも大層書きました、德義は昔より衰へたと云ふことを喧しく書きましたけれども、其德義が衰へたと云ふことを世の中の人が言ひ、又新聞にも書いたと云ふことは、誠に一方から言ふと喜ぶべきことで、若し德義が全く衰へて仕舞つたなら、衰へたと云つて嘆く人も騷ぐ人もなし書立てる人もないでせう、衰へたく／＼と言はれたことは、寧ろこれを盛ならしむる曙光の仄めく時であつた、今日になつて、私共が立派な軍人の働きを傳へ承ると、私共はそんなに心配をしなくつても宜かつたものをとまで考へます、けれども、併し外國新聞などの言ふが如く、日本の軍隊の甚だ強く日本國が勝續けると云ふことに付ては、日本國民は宜しく小學教員に勳章を與へなければならぬとあつたが、それは誠に一方には尤もなことであると云ひたいのです、どうも德育は衰へたと云つて多くの人々が心配したことは、多少効力があつたであらうと思ひますが、併し前にも申した通り、社會は餘りに太平が續けば腐敗すると云ふことはどうしても歷史は歷史を繰返しまして此原則は免れることは出來ませぬ、國家が太平が續き安逸に耽ると國は惡くなつて仕舞ふ、腐敗して仕舞ふ、日本は時々何かの刺激がありまして、維新後もなか／＼太平ばかり謠ひまして腐敗すると云ふまでには至りませぬだつたが、併ながら、日清戰役後遠慮なく言へば日本國民の心

は、非常に奢つたと思ひます、少しも、弱い國を負かして自分が非常に強いと思つたならば間違て、然し自分が打懲らして自分が強いと思ふのはまづ仕方がないとして一歩を讓りましても、打懲らして見たことのないところの國民も亦さう思つて居る、日本は大變豪い、吾等は餘程優れた人であるとのみ思つて居つて、其頭を叩く者がなかつたならば日本の社會はどうであつたか知れませぬ、體育でも心育でも智育でもどうであつたか知りませぬ、少康に安んじたかも知れぬ、其れをいへば、誠に戰爭は慘劇な慘酷なもので、新聞で見ても、軍隊の困難非常な戰死者傷病者實に人の心膽を寒からしめる所の慘酷な情けないこと、一日も早く平和に歸すれば宜いと云ふ戰爭でございますけれども、若し日本國が斯の如き大きな困難を打掛けられずして十年二十年と經つて人心が腐敗して、折角今日のやうに進みつゝあつた所の體育も怠つて奢りに長じ太平を夢みて、千萬一腐敗するやうな傾きになることを考へたら、今日の戰爭は一方から言へば感謝しなければなりませぬかも知れませぬ、軍隊に於ける多くの損害を聞きますと實に御痛はしいとも何とも言ひ樣はございませぬけれども、なか／＼此度の戰爭は、日清戰爭の時のやうに容易くない、敵も亦強い、敵も十分に準備がある、なか／＼日本では一通りや二通りの覺悟では勝を將來に全からしむることは難いと知つたのは、是は實に吾等に取つて非常な教育であらうと思ひます、さうするとモウ既に始つた戰爭は、縱令如何程の損があらうとも、如何程嫌なものであらうとも、如何程慘酷なものであらうとも、中途にして、われは膝を屈することは出來ませぬ、是非十二分の目的を達しなければなりませぬ、さうなると、私共女子の身でもなか／＼容易な考へをもつては居られませぬ、國民の援護が不十分であつては、決して是から先き軍人方が滿足をし安心して進まるゝことが困難であらうと思ひます、それにつけても是から先き、此精神と身體との益々健全なることを期さ

なければなりませぬが、承る所に依れば、遼東の寒氣は既に日本の一月位であるさうです、さう致しましたならば、日本の嚴寒と云ふ時までにはどの位の酷寒が來ますか、實に氷の床に臥し雪の襖に凝ね、さうして敵と爭はなければなりますまい、日本人は寒さには馴れませぬ、なか〳〵そんな寒さに身體を鍛へられて居りませぬのに、之を十分耐忍して行くと云ふことは唯精神一つです、どの位苦しいかどの位辛いか知りませぬけれども、吾れ一歩を退けば日本の國威が一歩退くと云ふ、忠君愛國の精神を以て、之を耐忍せられます、さうすると、私共は銃を執り劍を提げてこそ行かぬが、心は其氣になつて居なければなりませぬから、どうか是から先きは、戰場に行けば其心になるが行かなければ其氣になれぬと云ふ人もあるかも知りませぬが、兎もあれ、能ふだけ身體を鍛へると云ふ覺悟がなければならぬと思ひます、隨分寒い日をしても風を引かない、どんな無理な勞力をしても當らなかつたと云ふやうな身體を養つて、さうして其身體の強くすることとは國家をして強からしめるのであると云ふ覺悟をもちたいものです、可哀さうに今日の兵士はそれだけの身體の練習が出來て居らぬから、是からの日本人は無理をしなくつても樂に凌がれると云ふまでに、體育の增進を計り又精神教育を進めなければなりませぬ。

今日の日本人は世界より非常な喝采を得ました、凡そ人間は高い名譽を受けた程怖いものはない、齒牙に掛けられない人は樂であるが、名譽を一度得ると、ちよつと惡いことがあつても人は眼に角を立てゝ之を咎めます、であるから、日本國は非常な名譽を得たからして、此名譽を全くして、益々進めやうと云ふには、なか〳〵今日の樣な覺悟ではまだ中々難かしいだらうと思ひます、忠君愛國と云ふ太古以來の日本の尙武の氣象は凝つて武士道となり、現はれては軍人が強いと云ふことに先天的の如くなつたのであるが、併し他のことは決してまだ整頓して優

れて居るとは言へませぬ、まだ〳〵吾等の働きは不十分です、二千五百萬に近い同胞の姉妹は、決して未だ十分覺めて働いて居る者ばかりはありませぬから、體育と云ひ心育と云ひ、智育と云ひ之を十分進めて、日本の國の光りを増進すると云ふことは．是から後の吾々國民の母たる人に俟たなければなりませぬ、それに付きましても、強健な身體を造つて置くと云ふことは、どれ程精神教育を勵行せしむる上に力があるか知れませぬから、學校に於ての體育や規定の運動は云ふまでもなくどうぞ若い方に希望致します、人間は實力を養つて、總てのことは實踐躬行するてなければ本統の價を永遠に得るとは出來ませぬから、學校の運動も宜し、體育も宜いが、家に御出でになる時に、幾ら澤山人を使つて御出でになる方でも、掃除もすれば片付けもすると云ふ覺悟があらまほしい、殊に身分の非常に高い方は生徒の資格である中でなければ出來ませぬから、年少の時に出來る丈勢力を務むると云ふ事は甚た大切でもります、況や餘計人の居ない家では二人使つたものは一人に減らしても、自分は身體が強健であるから十分働いて、家政を立派に整理すると云ふことにし、尚ほ餘力を以て公共のことにも盡せると云ふまでにならなければならぬと思ひます、西洋各國は日本の如く多くの奴僕は使ひませぬ、それは社會が秩序立つて居るから出來るではありませうけれども、日本でも、公共のために盡して居らつしやる奥さんが、又能く家政を整理して居らつしやいます、然らば、公共の事に盡されない所の人はどの位特別に家政が整理されて居るかと云ふと、さうはまゐらぬものだらうと存じます、兎に角、體育を十分進めて家のことは、十分に働き整へ、進んでは平國のことにも盡す、公共の事にも盡す、さうして尚ほ綽々として餘りあると云ふ精心と體力とを御養ひにならんことを希望致します。

新潟支會講話

此篇は新潟支會に於ける某工學士の談にして衛生上裨益少からざるものなり右は和田幹事の寄送に係る

在新潟市　工學士寄稿

◉新發明暖爐

火燵亡國論は曾て新潟市の一新聞に於て之を見たり議論としては至極御尤も千萬にして天下何人と雖も恐らくば些少の異議なきを信す、左れども名論必すしも實行さるゝを得す、理想と世の中の實際との間に介在する多少の隔絶は一朝一夕にして除去し得べきものにあらざるなり。健全なる精神は健康なる肉體に宿るとは吾人の持論にして平素滋養食及運動に注意し殊に冷水浴に因りて健康を維持せんとすれども時々感冒の襲撃を受けて志を果さゞる事――殆んと十餘年の久に至る偶然一親友の忠告に從ひ斷然火燵を廢止してより玆に三年此間吾人一人が一回だに感冒を病まざるのみならず妻及三人の子女に至る迄殆んと感冒の何者なるやを忘るに至れり。火燵は暖を取るの目的に對し此上もなく經濟なり然れども感冒の爲め業を休み藥を買ふ事を思へは不經濟此上なし、去りながら江原素六君の如く無火鉢主義は此北越にては少しく閉口なり、普通の火鉢にて充分の暖を取らんとせば炭酸瓦斯の爲め頭痛を病むのみならず、子女は火鉢に噛り付くを好まざる故殆んど其恩澤を蒙る能はす日本子女の常に青鼻を垂れ或は發育不良なる等は全く日本家屋の構造不備にして温室の方法其當を得ざるに基くとは醫學界の定論なり二十世紀の今日世人も亦少しく此點に着目せる事は秋冬に際し京阪の大新聞は元より地方の小新聞に至る迄時々暖爐發賣の廣告あるに因て明白なり吾人も亦此點に注意し自ら各種の暖爐を實驗し結局得たる斷定は外國風の暖爐は日本家屋には不適當なりとの一事あるのみ其故如何と云ふに日本家屋の紙張障

障子は室外の寒氣を遮斷する能はさるが故に室内の暖氣と室外の寒氣は自由に出入し且つ天上の構造粗惡なる爲め室内の暖氣は直に騰升し去つて少量の薪炭を焚きては一室の全部を暖むるを得ざるは實際なれども此所に最も顯著なる一事實あるを忘る可からす夫は日本室にて暖爐に向へは背の方が特別に寒き事なり何故かと云ふに暖爐内の薪炭を燃す爲め必要なる空氣は之を室内より取らざる可からす、室内にて折角と暖まりたる空氣は非常なる速度を以て多量に烟筒を經て屋上に排出さるゝを以て其代りに多量の寒冷なる外氣を室内に供給せざる可からす斯の如くして唯さへ冷却し安き室内の暖氣は暖爐の在る爲めに倚一層其冷却を速にするの傾あり否な暖爐は斯る場合に於ては暖室の爲めと云んより寧ろ冷室の爲めに設けられたりと云ふを至適なりと信ずるものなり

此欠點を補ひ此必要に應ずる新案暖爐は此頃一理學士に因て發明せられたり名づけて大和暖爐と云ふ其構造の概略を示さんに暖爐内燃料が必要とする空氣は全部室外より取り入るゝの仕掛と成り居る故室内の暖氣を徒費せす從て室外の寒氣を吸ひ込むの憂なし加之暖爐内の熱氣は直に烟筒に行かす暫く暖爐内に設けられたる螺旋狀の迂廻行路を執るの仕掛に因て熱氣を充分に利用するの考案なり、夫の次第に依り室内の温度は暖爐傍と障子付近と差したる相違なく且つ薪炭を要する事實に驚くべき少量なり假へば十疊の座敷ありとせよ三本の薪を此暖爐に入れ空氣口を適宜に加減し置かば慥に壹時間は燃へ終らざるなり此割合にて冬期午后四時より十時迄六時間焚くものと見て拾八本焚く計算なり假に貳拾本を焚くものとして薪拾本を小買にしても三錢乃至五錢とせば一夜の燃料代金は金六錢乃至拾錢なり、此は酷寒中の一例なれども其他の寒氣酷烈ならざる時季は空氣穴を加減し貳本の薪にて貳時間以上室温を六拾度以上に保持するを得るなり、斯くして一夜平均金二三錢にて充分の暖を執り得るとせば是れ實に安

價なる暖室方法と云はざる可からず、而て一室を隅々迄と平等に暖むるを得て且仕事に便利なるのみならず子女の遊戯上快樂を與ふるの點に於て効益少々にあらずして其發育を上進する事多大なるは疑を入れざるなり社會の現況は斯る應急の發明を歡迎するを信ずるが故に茲に世人に紹介す

因に右は既に專賣特許となりたれば其製造或は特許權に關し東京市本所中の郷瓦町一番地大平工學士は紹介の勞を執るべしと云ふ

米澤支會講話

非股幹事寄送

佐土丸遭難談

（十二月二日婦人衞生會米澤支部談話會席上に於て鐵道事務員阿部正夫氏談話）

私は只今御紹介下されたる佐土丸遭難者の一人不思議にも九死に一生を得たる阿部正夫と申すもので御坐りまする今夕は熱心なる愛國心に富んで居られ且つ非常なる同情に厚き御婦人方が斯く御大勢御集り下されたる席に於て私かお話しすることを得ましたのは實に無上の光榮と存じます深く御禮を申し上げます併しながら淺學菲才加之口は極く下手でありましてお話しも前後するかも知れません殊とに一旦海中に飛び込みまして十中の八九迄は死んだものが不思議にも蘇生致しましたので夢か現か精神も錯亂して居る樣な感が致しましてこれ迄は公會の席上や皆さんの御集りなされた席でお話しなどやつたことはありませんので演說家が演壇に登つて縱橫無碍に饒舌る樣に流暢な辯を振ふことは出來ません其の邊はよろしく御推諒を頂きたいのです私は只だ出發前後の模樣、遭難前後の有樣及び入院致しましてより退院致しまするまでの顚末概略をお話致そうと思ふのです

私はこの時局に對し大いに感ずる所ありまして聊か

國家の爲めに盡したいといふ考ひにて鐵道隊に從事することを志願致しましたが幸ひにも認可になりまして本年の五月二十八日に編入されました夫れより鐵道隊は御承知の如く東京赤坂御所の方面なる北町南町及び表町等に宿割りになりましたが私は表町三丁目の秋山慶雄といふ人の家に宿舍することゝなりましたが同宿の人は十一人居りまして私は不肖ながら宿舍長となつて居りました然るに宿主の待遇は非常に懇篤でありまして一同感じて居りました内六月五日はいよ／＼出發することゝなりましたが其の前夜は又た宿主は非常な盛なる送別の宴を開いて呉れまして家族一同誠心誠意吾々十一人を歡待されまして家族一同より夫れ／＼是非國家の爲めに盡力して呉れと言ふ樣な送別の辭をいはれ令孃はオルガンなど奏して呉れられ其の歡待優遇には吾々一同感謝に堪へざる次第でありました斯る待遇を受けては吾々及ばずながら是非戰地に臨んで粉骨碎身以て其の厚情に報い奉らなくてはならんと感奮致したのです而して新橋を發車致しまして廣島迄て直行致しましたが其の途中亦た沿道各驛至る所非常な歡迎歡送或は旗を立て或は帽を振り萬歲の聲で送られまして中には頭に霜を戴き腰は梓の弓となつた老翁もあり三四才の小兒が母の背に在りて紅葉の樣なる手を上げて萬歲を呼ぶもあり至る所の老若男女誠心誠意を以て送られました此の如き國民の赤心より出てたる厚き同情を受けました時には嬉れしいや欣はしいやら其の時の感情は何んともお話は出來んのですそれから小學校の男女生徒は至る所ろに敎師に導かれて盛んに威勢好く軍歌を唱ふて送られ或は妙齡の婦人方は海老茶袴の扮裝にて湯茶を饗せられ或は手拭を水に絞りて汗をお拭きなさいといはれ用意周到厚情至らざるなく至る處にかくの如き眞心込めたる好意を受けましたので國民擧つてかく吾々を遇せられ吾々を斯く迄に重んぜらるゝ以上は吾々は是非一身を犧牲に供し其の御恩の萬分の一に報い奉らなくてはならぬと覺悟致したのです

厳島に着しまして其處に一週間許り滯在致しまして六月の十四日にいよ〳〵宇品を出發することゝなりまして其の日の午前には常陸丸が近衛〇〇〇聯隊を搭載して宇品を出發しましたか運送船に〇〇を乘せるには馬匹〇〇〇〇等にて頗る時間を要しまして〇〇〇〇佐土丸は午前十一時に宇品を出帆致しましてドシ〳〵と瀬戸内海を進航し馬關海峽を通過して翌日の朝門司を後にしてドシ〳〵と沖に向つて進航しました門司を去る三十六哩沖の島附近に進航しましたのは即ち私等の身に採りては到底忘るゝことの出來ない六月十五日午前九時頃てした所が遥かに砲聲の盛んに聞えたので一同驚きましたが神ならぬ身の誰れ一人敵艦が來襲したなどゝは知る由もなけば日本海軍の演習して居る所てあらうなどゝ話し合つて前進したのでありました然るに何んぞ圖らん此の砲聲は吾が同胞が滿州の野に苦戰奮鬪して負傷したる將校兵士を搭載して歸航せんとせる和泉丸が露艦の爲めに撃沈されて居る聲てありましたと云ふことは後に聞いたことてありました然るに砲聲が益々盛んになり愈よ近くなりました午前十時には常陸丸の番になつたてす佐渡丸よりは肉眼ては少しも見えません望遠鏡て見た人は忽然常陸丸が敵艦にやられて居ると．．叫たのです一同驚きましたがマサカ敵がソンナ所まで來て居ると云ふことは夢想だもせざる所てありましたから誰れも信んじません小林源藏君などは將校室に居つて頻りに碁を打つて居つたのでナーニ敵艦なんか來るもんかなどゝいひつゝ平氣の平左てパチリ〳〵やつて居つたのです所ろか忽然として露艦三隻佐渡丸の三方に現はれたのです三方よりチヤんと佐渡丸を取り圍んだのですマゴウ方なく露艦てす即ち浦鹽艦なるリウリツクにロシヤ、グロンツボの艦てすこの三艦が既に常陸丸を撃沈し吾が同胞貔貅の士〇〇〇人を海底魚腹に葬り血潮の波濤を蹴立ゝ今度は吾が佐渡丸を撃沈せんとし來たのです（此の間敵艦と佐渡丸との位置を黒板に畫き佐渡丸を中央にして南と左右に敵艦が現はれたる所を示

す）斯く三方より取り圍みまして直ちに「止まれ：：」と云ふ信號をやりました信號と申しまするのは旗を振つて合圖をするのです私等は何をする所であるか少しも分らんでしたが傍らに元運船會社に居つたものがあつてあれは止まれと云ふ信號であると教へました斯る意外の現象に遭遇しまして佐渡丸は少し逃げ出しましたスルト敵艦三方より砲門を開きて接近致しまして近きは約五百メートル五町許りの所に至りヅドンと一發佐渡丸目掛けて砲撃したのですソコで佐渡丸も進退これ谷まりチヤンと停まつて居つたのです處が敵門よりボートを卸ろし士官は水兵を率ゐてやつて來まして佐渡丸の甲板に上り吾が將校と談判を開始致しまして申しまするには是非戰鬪員は逃れ得る丈の手段を盡して逃げよ戰鬪員は吾々と一處に吾が敵艦に來たれ：：準備時間として約四十分を與ふと云ふ：：：」のでしたソコデ吾が將校は僅か四十分の時間にては逃がるゝことが出來ないのでモー少し猶豫を與へよと談判しなました所が敵の士官は吾々は既に危險の位地に陷つて居るのであるから時間の猶豫は到底與ふることが出來ないと云つて斷然吾が要求を拒絶してサツ〳〵と歸つたのです露艦より來たれる士官は斷然我が要求を拒絶して歸艦しましたので佐渡丸の運命も既に極まつたのですそこで將校は斷然決意最後の宣言を下しました（吾々軍人は潔よく自殺するのです非戰鬪員諸君は各自逃れ得るの道を講ぜられよ云々」と此の宣言の下るや否や艦内の狼狽甚しく上を下への大騷ぎとなりましたそこで第二の信號は直ちに現はれました即ち「其の船を見棄てよ」と云ふの信號です此の信號と同時に敵艦三隻よりはドン〳〵と大砲を撃つたのです艦上の甲板に居つては甚だ危險でありますからドヤ〳〵と先を爭つて室内に逃げ込みました（こゝで再び氏は艦體の略圖を黑板に畫きて艦の構造を說明したり）船は御承知の如く一番上部は上等室で即ち將校室となつて居ります次ぎは中等室次ぎは下等室で最底の所には石炭や貨物を積み込んで居ります中央

は機關室て煙突は中央にあり左右にマストが立つて居ります艦腹には丸き窓が附いて居ります私も衆と共に室内に入りましたフト窓より向ふ見ましたら敵艦は砲門を開きて頻りに砲撃して居りますその凄しい有様は到底形容することが出來ません砲門よりは靑い火がピカッと見えるとヅドン……ドッと天地を碎くる響が致します海面を見ると氣早やなる人は既に澤山海中に飛込んでブク〳〵と沈んだり浮きたりして居りまする或は空氣袋や空氣枕に携はり或は板切れなどを手にしてブク〳〵して居ります今迄て浮きて居つたのは沈んで仕舞ふものもありました之れを見たる時は實に云ふに言はれん千萬無量の感に打たれましたソコで私もいよ〳〵決心致しましてドーセ死ぬなら見苦しい死に樣は仕度ないものと思ひ服は悉く着替へして外套を着し靴を穿ち室内を出でましたが其の時には各室に誰れ一人殘つて居つた人はありませんてした梯子を昇りて甲板に出ましたが甲板上の騷ぎと云つたら非常なものです右往左往に騷ぎ廻はりて人々の顏色と云つたら實にヒドイものです眼色も盡く變はつて居りまする即ち盡く血眼になつてワラ〳〵と騷ぎ廻はつて居りますさて海に飛び込めば直ぐ死なれるか人情としてソー直ぐ死にたくもない船に殘つて居つて船と共に死生を共にせんかと思ひましたがそれも只だ時間の少し長短がある許りてやはり直ぐ死ななくてはならない水練も知らざる私ですから到底生くるといふことは出來ない早く死ぬほうが好いが少しでも生きて居つたほうが好いかとの疑問が私の胸の裡に往來して居りましたがいやドウセ死ぬならあらゆる手段を盡して死なんと決心しソコで最後のボートに乘りボートに運命を任かせんと決心してボートの梯子に昇りました御承知の如く艦には乘り下りする爲めにボートが準備して居ります（此の所又たボートの船に準備して居る所を圖にて說明したり）舷頭に二本の腕木がありて其の腕木にボートを釣るして置きます佐渡丸には四杯のボートがありました所が其のボートを卸ろさぬ四

杯のボートに悉く人が一杯に乘つて居りました乘つて居つては卸ろすことが出來ませんが一と先づ下りろといひましても聞き入れません先きを爭つて乘りましたのは悉くシガミ付いて何んと云つても聞き入れませんでした四隻のボートに先を爭ひ我れ勝ちにと乘り移りたるものは溢れコボれそうに乘つて居つて幾ら制しても聞き入れません皆な〳〵ボートにシガミ附いて何を云つても聞き入れません船員三四名參りて又た頻りに下りろと云へましても到底聞き入れる樣子はありませんそこで船員も止むなく其の滿載して居るボートをその儘卸すことゝして一番端のボートを引き卸ろしましたするとボートを釣るして居る腕木が折れました一隻二十五人の定員たるべきボートに七八十人も乘つて居ますから溜りません卸ろす斗端に腕木がボーンと折たのです折れると七八十人も乘つて居つたボートは其の儘顚倒にヅトンと海中に轉落致しました其の悲絶慘絶の光景と云つたら何とも云ひ樣がありません私は一方の端のボートを指揮して居りましたが今此の慘狀を目擊しては又た〳〵此のボートも其の覆轍を踏むの外がないのですから更らに聲を勵まして頻りに下りろと云ひました兎に角下りなくては今あの通りの運命に陷るの外はないのであるから早く下りろと命じましたがなか〳〵聞き入れませんそこで劍を拔いて斷然決心嚴令を下しまして漸く下ろして舷頭に整列せしめ順々に乘り移らせることゝして一のボートを卸ろしましたすると又たなか〳〵靜かに乘り移るなどゝ云ふことには參りません二三十人一同に乘り移つたものですから中途に一方は長く垂れ一方は短く綱が留まつて居るものですからボートは一方に傾いて下がつて居りまする（此の時又たボートの中途に傾いて下がつて居る光景を圖に依つて示す）乘つて居つた人々は皆な〳〵一方にスガリ附いて蜂や蟻の如くピッシリと一方にのみ片寄りてスカリ附いて居りまする此の有樣を見たる私は何んとも云へない感情に打たれました私が切角指揮して一のボートを卸ろしてこれに

乗り移らしたて斯くの如き有様となつて此の人々を見殺しにして仕舞ふのであるかと思つたら身も魂もありません一ツー之れ等の人々と死なうと思つて遙か中途にブラ下がつて居るボート一端人の居らない所を目掛けて前後の考いもなく外套を着たまゝ靴を穿ちたるまゝドーンと飛び下りましたすると私の飛び込むと同時にボートを釣るして居つた綱がブッツリ切れて眞倒さまに海中に轉落したのです其の時の心持といつたら夢か現か生氣であるか死んであるか全く夢中です海中に落ち仕舞つてドブント一度は沈みましたか間もなく浮き上かつたので丁度ソコにあつたボートにツカまつたのです二三十人も一度に同じ所に沈んたのですから運の好いものは上になり運の悪いものは下になりして浮きつ沈つみつしてブク〱騒いで居りました

浮き上がつたものはボートの縁にツカまりまするツカまると一方から許りツカまるものでありますからボートは直ちにヒックリカへるのです方々からツカまつてボートを又た元の位置にヒックリカへそうと思ひましてもなか〱力が一致して居らないからボートを浮めることは出來ませんのです轉覆したるボートの周圍にスガリ附いてブク〱騒いで居る内に何の幸か私の外套が脱けました外套が脱けたので身體が輕くなり大いに自由になつて來ましたから靴をも脱ごうとして片方から脱ごうと思ひ片方の手で片方の足に手をやりまするど直ぐ後ろにヒックリへりまして海にブク〱するのです何度か脱く氣になりましたが到底脱くことが出來ませんでした

斯くしてボートに掴かまつては離れ離れては掴かまりボートをヒックリ更へそうとして居りましたのは約四十分間位でして其の間三方の露艦よりは頻りにドウン〱と砲撃して居りまする砲彈は佐渡丸の前後左右に落ちまする所が敵艦より魚形水雷を放ちました其の魚形水雷はヒユーと來て佐渡丸の中央に命中致しました艦の中央即ち機關部に命中したのですア、……溜りません煙突はヒックリかへる黒烟が

揚る慘憺たる有様でした艦も半ば撃沈したのです然るに此の魚形水雷は私のボートに取りましたは不思儀な幸福を與へましてその爆發したる震動の爲めか今迄て伏せつて居つて何んとも致し方のなかつたボートかヒッタリ直つて水平になつたのです所が亦た不思議にも艦の甲板の上からバケツを投げ込み綱にすがり來りてボートの水を淺へて呉れたものかあつたのです水を淺へましたのでボートは益々好成績を現はし浮き上つたがので皆な〱乘り込んで頻りに水をかへて居りました所が本船から綱を傳はつてドシ〱乘り込んで來るのですされどソー澤山乘り込まれてはボートは亦た再び轉覆するのですから早く綱を切れと命令を下しまして何れへか航進しようと思ひましたが肝腎の櫂が無いのです所が亦た何の幸か櫂が流れて來ました一丁は滿足のもので一丁は片方壞はれて居りましたが二丁まで櫂を得たので一生懸命に漕ぎ出したのです午後の二時三時の頃は沖に出てましたので四方見渡す限り茫々として何んにも見えんのですそうして雨が降つて來ました風も追ひ〱烈しくなつて來ました玄海灘は御承知の如く波濤の荒らい所ですから非常の高い波がやつて來るのですダン〱夕方になるに從つて風雨益々烈しく山を崩し來たる如き怒濤かやつて來てボートは始終グラ〱しました波にゆられ上りてはゆられ下り今轉覆するか今や命がなくなることかと生きた心がないのです海を御覽にならん御方には殆んど御想像も出來ませんのです斯る難儀に御遇いにならん御方には何んとお談し致して好いやら到底お話のしようがないのです私などはボート經驗もなく水練も知らんのですから船に醉ふて嘔吐を爲すやら目舞ひをするやら何んともヒドイ有様でした外の人も同様です少し馴れた人は亦た二人で始終交る〱水を替へて居るのです水がたまれば直ぐ轉覆するのですから一生懸命水を替へるのですボートを越す波で少し猶豫して居ると直ぐ水がたまるので所が非常にあわてたものですドードの底に栓を刺すのを忘れて居つたもの

ですから漑いても〳〵水が直くたまるので晝の內は左程にも思はんで一生懸命水を漑ひ一生懸命漕ぎ出したなら何處へか着くことだらうと幾分かの希望を以て一生懸命働いて居りましたが夜になつて來てからは俄かに心細くなつて何んと云つたら好いやら例介へんかたない感覺に打たれたのです夜の十二時一時となつて來て風雨が益々烈しく波濤も一層激烈になつて來ましてモーたまらんと思つたことは何度あつたか知れません御經驗のない御方にはお感念も薄いでしようが實に例介へ樣のない慘憺たる有樣であります四方暗澹として咫尺を辨ぜす丸で鼻の先きは見えんのです六月の時候とは申しながら大風猛烈で夜も深けたので非常に寒くなつて來ました而して船中僅かに毛布三枚あるのみです赤毛布二枚と白毛布一枚ありましたその三枚の毛布を一個頭から引き被むりまして雨を凌いで居りましたが篠突く如く降り來たる雨とヒユー〳〵と打越す波とに皆な〳〵ビシユ濡れた濡れ通しです一方には入た水がドン〳〵這入つて來るので一生懸命水漑をして居るのですが皆な〳〵疲れ果てゝ水を漑ひる勇氣も無くなつたのです交はつて水をかへろと呼ぶ聲も渇れ果てゝ微かに耳に聞へる樣になつたのですされど水を漑へなければ直くボートが轉覆するのですから命のあらん限りは替ひて居るのです交れ〳〵と呼ぶ聲も實に憐れに微かに聞へる樣になつて來ましたが私は好く〳〵疲れ果てゝ何時眠るともなしにトロ〳〵と眠つたのでした

何時眠るとはなしにトロ〳〵と眠つたと思ふ內にフト目が覺めましたが最早や夜が明けになりまして精神もやゝ壯快になりましたが濃霧が四方を塞いで居つて東西南北がチットも分りません獨ほ茫々たる所謂五里霧中に彷徨して居るのです然るに午前七時になりまして一方僅かポカリと明るみが現はれたのですこれは疑ふべくもあらぬ太陽の東天に昇つたのですそこで東の方はあちらであると云ふことが分つたものですから皆な〳〵元氣附いて大奮發になつて

其の方角に向つて漕ぎ出したのでしたお話か何んたか小説にもありそうでありますが其の東の方に當りましてポッチリと黒いもの見えました皆な〳〵これを認めて飛び立つ許りに喜び勇んだその黒いのは船であるか島であるかと云ふ疑問が起つた夫れ〳〵研究の結果確かに船と云ふことが解つた益々勢を得て一生懸命其の方に向つて漕ぎ出した向ふでもこちらに向つて進んで來る樣子である午前八時頃になつていよ〳〵接近してあり〳〵と船であると云ふことは分つたので白い毛布を櫂の先きに結び振り廻はして合圖を為し一同あらん限りの聲を揚げて助けよ〳〵と叫んだ所が向へも通じたと見えた九時にはいよいよ接近して遂に其の船に救はれたのですさて此の吾々の命の親なる船は山口縣阿部郡鶴江浦の川邊藤一氏と云ふ人の持ち船であつて一艘の漁船であつた船子には栗林彥吉、中澤常松、荒瀨良一、中山興助、宮島安太郎など云ふ人々が乘り込んで居つた此の人々は實に吾々に取つては神か佛です終生忘るべからざるの恩人ですボートか其の船に近い附くや否や靴のまゝ其の船に飛び移つたです所が漸々命が助かつたと安心して氣がゆるんだものですから船に乘り移ると同時に負傷した個所が俄かに痛くなつて來たのです則ち右の手や左の足の打撲傷が俄に痛んで來て非常な痛みとなつて手も揚からず足も動かす何んでも身動きが出來なくなつて仕舞ふたのです同勢三十七名盡て乘り移り盡く助けられたのです私は最も重傷でした小用に立つことが出來ません六七人の人々に助けられて船頭に立ちに小用を逹しなど致しました所が船中は又は飯など焚いて吳れて握飯を一づゝ與へて吳れました併し一晝夜も空腹で居りましたけれども食ふことが出來なかつたのです同勢の中には又たシャツ一枚丈けて丸裸體のものもあつたが漁夫の着物など與へられて皆な〳〵肌寒を凌いたものです漁夫の親切は至れり盡せりて種々厚ひ手當をして吳たのです斯くて此の親切なる漁夫等の爲めに不思儀にも助けられて蘇生するを得たのです實に夢の樣

てありまする
漁夫等に救はれ親切なる取扱ひを得まして其の漁船は一生懸命陸地目掛けて漕ぎ出したものすから其の日の午後二時には下の關水上警察署の手に救はれたのです私は六七名に補けられて上陸致しまして市民より寄贈になりましたる單衣と袷せとに着替へ致しました先づ應急の手當てを受けましてタ飯は粥を頂きました夫れより一同門司に送らるゝこととなりましたが私は重傷で足も手もキカンので先づ下の關衛戍病院に收容されまして六月十八日には擔架に載せられロセッタ號と云ふ運送船に乗り翌十九日には又に擔架に載せられてパウンヤ號に乗り移り小倉の豫備病院に收容されて治療を受くることゝなりましたが其の豫備病院の治療の行き届くことには實に驚きました其の看護婦の親切なることは實に至れり盡せりて其の眞心より出てたる親切を以て取り扱はらるゝので我れ知らず男泣きに泣きつゝ感謝の意を表して居りました一日の内に繃帯は三度四度つゝ取り替へて呉れられます湯に這入るには肩に携はりて入れて貰ひました帯も締めて呉れました實に丁寧なる取扱ひを受けましてお蔭で足の方は餘程好くなりまして靜かに歩行さるゝ樣になりまして廣島病院に後送さるゝことゝなりまして其處には約二週間許り治療を受けまして東京の澁谷病院に移りました此の澁谷病院に入りまして初めは二十六番室に居り次ぎに十番室に移り又た二番室に移りましたが此の二番室は今夕も此處に來てお出ての中條梅節さンの令弟にして元陸軍藥劑大監高橋秀松さんの御養子なる高橋養助さんは醫官をやつて居られたので同郷人の縁故と云ひ非常の好都合で高橋さんには非常に厄介になりました實に特別なる取り扱ひを受けたのです又た其室の看護婦は赤十字社の直轄なものですから熟練なる看護婦でありまして待遇も實に周到で御座りました其の熱海に三週間許り富山の分院に三十日許り居りまして永らく所々の病院に居り治療を受けまして大半快復致しましたので此の國家多事の時局に當り

ソー何時迄も／＼便々と入院して居りますのも心苦しく考ひましたので退院を願ひ出てましたが先月の六日に許されまして何等の幸福か亦た今度歸郷する事を得て皆様と一堂の裡に於てお話しすることを得ましたのは實に欣ばしきことゝて御坐りまする實に私の光榮と存じます一旦死んだものが蘇生してこんなにお話しするなどゝ云ふことは何等の幸福で御坐りましようか必竟皆様のお陰に依て斯る幸福を得たのです今日の所では道の一里位ひも歩行致しますと足は疲れを覺えます字を書こうと思ひましても手が震ひて書けませんけれども兎に角蘇生することを得て漸々復旧するのですから是非粉骨砕身國家に奉じて皆様の御恩に報いるの決心で御坐ります（完結）



寄書

日常衛生綱目

新潟縣小出病院長　醫學士　竹中成憲

◎室内

▲●●談話　肺患者と談話するときは三尺を隔てゝ語るべし密談を要する時は自から己れのハンケチを右手に用意し機を見て之を巧に使用し患者咳嗽時の豫防とし語るに當ては彼の呼吸に注目し彼、空氣を吸ふとき我も吸ひ、彼吐くとき（呼氣）我も吐くべし

▲●●烟管　に就ては左の注意を要す

一、他人のものを借用すべからず

一、自己のものも貸さゞるやうすべし

一、吸口は金屬にあらざるものを用ゆべし金屬は

齒を害す

一、吸口は彫刻は惡し細菌附着の恐あり

一、吸口は直接に疊の上に置くべからず煙草入か何かにモタレしめ疊との間に一分たりとも距離を作るべし

▲竹筒●● 痰が切れぬとて煙草盆の竹をなめる者あり危險也

▲嚏及び咳拂 は己のハンケチの裡に致すべし他人、我に向て之を爲すときは我ハンケチを以て之を防ぐべし

▲ハンケチ●●●● 鼻紙等をポケット又は袂に入るゝに就ては豫め左右何れの方どか平生より慣習として入れ所を定め置くべし然らざれば菓子又は煙草等口にするものと汚物の混る恐あり我小笠原流既に此規定を設く

▲ランプ臺の底●●●●●● ランプはランプ室又は戸棚又は不潔なる板の間に終日置かる火を點じて直に之を机の上、甚しきは膳の上に運び來る其危險思はざるべからず必らず毛糸其他には蒲團を作り且つ清拭すべし

▲カバン●●● は外出旅行の時、車のケコミ（土足にて歩る所——足の在る所）又馬車、電車、汽車の土間に直接に置かるゝ者にして其底は泥、其他不潔物を受くるものなるを以て歸宅後床の間に置くべからず

役所に出てはテーブルの上に置くべからず

此事は旅行者は特に注意すべし

▲辨當箱●● 亦然り辨當は役所、學校等の小使室の土間又は土足の板の間にあり此箱を直ちにテーブルの上に置き食事するの風あり危險なり

箱は脫して內部のみを机の上に外すべし

▲疊● の上に落ちたる食物は之を喰ふべからず小兒には落さぬやう敎ゆべく、決して「モッタ、ナイ」の一語の下に拾はしむべからず、疊の上は往來步行の詩は勿論便所の跡にも足又は足袋を拭ふものなきを思はず危險思ひやらるゝなり、將門が飯を拾ひたりとて秀鄕之を笑へたりといふ將門は衞生の事を知ら

ざりしなり

▲掃除　板の間の掃除（就中、學校、汽車、馬車、電車等の中に）は　鋸屑の濕りたるものを先づ撒き而して後、掃くときは細き不潔物　鋸屑に附きてよし

◎臺所

▲布巾（ふきん）及び雜巾　は其區別を明にし「巾ふきん」なるものを作り机の上等を拭ふの用に供すべし布巾は常に白色たるべし雜巾は褐色までを許す

▲杓の柄　には鍔を嵌め手にて握る柄の部分より垂るゝ汚水の桶又は瓶の中へ流れ戻らざるやうすべし

▲飲料水　は濾過又は可成は煮沸すべし

▲陶器（瀬戸物）　は白色、無地を良とす、九谷燒の如きは花瓶には良しきも食器には汚物、細菌の附着し易き嫌あり

▲漆器（就中卷繪）　は食器としては熱湯を嫌ふの恐あるがゆゑに良しからず

汁も茶碗を良とす卷繪には細菌つき易し

▲流し　に痰をするは惡し

家族中肺患者を生じたるとき其者のみに之を禁ずる事は情に於て爲し難し宜しく健者にも平生に於て之を禁じ置くべし

▲コップ、湯吞　の深くして其底に指の屆かざるものは掃除すること能はざるが故に惡し

▲井戸　は夜間蓋を爲すべし又一年數回かへる事よし毎回、櫛、かんざし、古手拭、鼠の死體抔があがるを見ても其不潔なるを知るべし

▲金だらひ　は洗面以外に之を使用すべからず家族中急に嘔吐（はく）するものあるとき金盥を以て之を受くるものあり甚だ危險なり

◎一個人

▲齒の裏　を掃除すべし表のみに心を奪はるゝ勿れ齒は瀬戸物と同一にして熱きものに急に觸るときは「ひび」いるものなり故に冷きものと熱きものと同時に飲食せざるやう注意すべし又砂糖は齲齒（むしば）の原因となる齒屑は粉の細きものを擇ぶべし

金屬にて齒をほじくるべからず

▲手拭及びハンケチ　は白木綿を良とす家族中にても各自、名を記し置く事よし下等なる生活に在ては手拭と雜巾の區別なきものあり「トラホーム」豫防の爲め最大切なり

▲神社佛閣の奉納手拭　は頗る危險なり万民汚手を拭ひ、之を洗ひ出すものなし多數は汚れ色黑しこれにて手を拭ひ口を磨り同時に眼をふくものあり「トラホーム」其他の蔓延に與て力あるものとす宜しく不淨のものは捨てしむべし殊に同所の水も不淨なり口にしたる杓を其儘水中に戻すのみならず水中には多數の錢の沈澱するを見る此錢は古きは數百年來消毒を受けず數百人の袖をくぐり其儘此水中に投ぜられたるものなればなり（金屬は多少殺菌の力を有するも其力微々たり）

▲上靴と手拭　西洋人は奇々妙々なり、彼の如く毎日シャツを取換へ朝夕手顏を洗ふに係はらず上靴を頗る清潔なるものと考へ居る者の如し其證は彼の旅行者を見よ彼はカバンの中に手拭、書物等と共に上靴を包まず其儘雜居せしむる事多し洋行歸りの我紳士宜しく此風を避くべし「足袋」たりとも別に紙に包みて後カバンに入るべし

▲爪　は必らず短かく剪むべし黑き爪は親より貰ひ受けた爪にあらず、爪の色を見て其人品の上下をトする事を得、支那の上流者は爪を長くす是勞働汚猥の不必要を示して自己の身分の高さを發表するなり餘り賞むべき慣習にあら

▲筆、鉛筆　を舐むるは惡し就中他人のものを借りたるときは注意すべし

▲帳簿　をまくるに指を舐めてするは惡し古き帳簿の左下角は先使用者の唾液（つばき）を含有す

▲貸本（小說類）最も危險

▲紙幣　の勘定も同一、傳染病者の先に所持せしものあり

▲郵便切手　は之を貼布するの際なめざるやう注意し硯箱附屬水入の水　使用すべし

▲封筒　も亦之を封ずる際なめざるを良とす

▲衣服 は成るべく薄着を良とす
重き衣服は運動を妨ぐ就中兒童に害あり

▲帶 は决してきつくしめべからず
兒童は之が爲めに胸廓の發育を妨ぐ

▲襟卷 は無用の長物なり

▲髭 に唾液を附くるは惡し己の唾液に毒なくとも不潔なるものに觸れたる手を舐むる事あり

▲櫛（くし） 他人のものを使用すべからず一家の中にても然り

▲盃洗 は數、多きを良とす宜哉小笠原流は各自盃洗を有するを式とす

▲小楊枝 を襟に刺すは惡し「歯くそ」を衣服に藏するとなり殊に多くは其行先不明又は摘出不能となり洗濯屋に到て現はるゝ事あり

▲錢湯 の板の間には黴介あるに係はらず痰の散在する事多し此板の間に肛門を平然と當つるは惡し宜しく女子の如く一脚を肛門下に置くべし痔瘻は結核なり

▲宿屋 の夜具、襟に白布ありとも安心すべからず前夜のものを取換へざる事多く而して前夜肺患者之を口に當てたるやも計り難し自己のシャツを當てゝ眠るべし

▲夜具 の襟に「びろうど」を用ゆるは宜しからず塵埃の附着し易きものなればなり

▲運動法 入浴中手拭にて自身で自身の背部を洗ふ事よし棒の體操なりと思ふべし又他人を洗ふは己の運動法なり

▲按摩 は自から運動し難き病者に之を行はゞ運動となるの効あるは勿論なれども他人を按摩するは却て己の運動となる也

◎便　所

▲戸の撮（つまみ） を千倍昇汞水にて時々拭ふべし
便所の板の間よりも病菌附着し易し

▲便所用紙 は鼻紙同樣清潔にして軟きものを用ふべし肛門を傷つけ痔瘻の原因となる新聞、反古、障子紙、繩、木葉（くづ、まめ、かき、なら）、篦、操

等用ゆべからず脱脂綿、ガーゼは良しきも價高し中以下の西洋人は日本紙を知らず新聞紙を用ゆるもの多し

◎家庭構造

▲西洋造　は土藏の如し塵埃の出口多くは入口の外になし此裡に住するには宜しく上等の「靴ふき」を備へ椅子、テーブル、寢臺を用ゆべし然らずして日本風的生活を爲すは頗る危險なり

▲窓　は床板まで通しとして下部に「手すり」を設くればアブナキ事なし以て塵埃を掃出すに便を與ふべし

▲欄間　室と室との間の鴨居の上即ち欄間を透として彫刻又は單に竹の一二本を横たへるものありコハ隣室掃除の際塵埃自已の室に到るを以て良しからず旅店、割烹店等注意すべし、壁を以て塞ぎ空氣を通ずる欄間は椽側の方に設くべし

▲壁土　の中には危險なる病的細菌發見せられたり壁は板を良とす寒國にては板を二枚とし其間に鋸屑を詰むれば暖なり

▲障子の釣換　吾人は障子の棧を内にするを例とす然るに此棧には塵埃つき易く且何人(肺病患者)も嚔、咳嗽等を爲すとき、特に障子の方に向く癖あり故に棧の上には危險なる細菌ある筈、障子は棧を外にするを良とす神様、佛様は怜悧なり皆棧を外にして内に安置してござる朝鮮にては外にするの風あり

（完）



大家叢談

花柳病談

此篇は山崎醫院長ドクトル山崎豐三郎氏の所説に係り(大阪新報所載の内拔卒轉載)

初めに總論を置き次に花柳の病分類をなし花柳病は淋病、軟性下疳、黴毒に分かたるゝことより逐次之を詳説せられたり

▲淋病　この病は、千八百七十九年ナイセル　によ

つて病原菌を發見せられこれを「ゴノコックス」と名づけたのであるが、即ちその細菌に起因した尿道粘膜の炎症であつて、觸接傳染性を備へ、重に交接によつて男女の間に傳染するものである、その感染つた當初は、通常二三日、長きは六七日間は何の異つたこともないが、その期を過れば自覺的に先づ尿道に瘙痒をおぼえ、頻りに尿意を催ほし、放尿が澁滯り、次に疼痛が劇甚なり、尿道口から濃が漏れ、日々に病勢が募つて來るのである、この時期には流石に誰しも醫療を請ふが三四週間も經過ば、疼痛も緩くなり、排濃も減少するので、通常この際にその手當を怠つて十の九までは慢性症に移行し、過度の勞働、多量の飲酒房事などで再發して永く困難するのみならず、經過中に不注意の結果として百般の合併症を來し、攝護腺炎、精囊炎となつて、精神鬱發して人間として活動することが出來なくなつたり、副睾丸炎、即ち通例睾炎といふところの病氣(兩側)となつて、子孫繁殖の種を失うたり、精系炎、龜頭包皮炎、淋巴腺炎(即ち淋毒性橫痃)膀胱炎などになつたり、又は睾丸炎からして睾丸結核、膀胱炎からして膀胱結核などを喚起すこともある、女子にあつては、尿道の淋疾(消渴)鼠蹊淋巴腺炎、子宮內膜炎、卵巢炎、甚しきは稀れに腹膜炎をおこすこともある、その他尿道狹窄、直腸淋疾、淋毒性結膜炎、淋毒性關節炎、淋毒性心臟內膜炎、淋毒性多發性神經炎、及び脊髓炎などを醸すのであるが、要するにこれ等の諸病は皆ゴノコックスに原因するものであつて、淋病を放任しておけば、病毒は唯に尿道の侵害にのみ止まるものでないことを、領會して欲いのである、そこで一寸注意までにお話しておくが、產後月經時の交接は、尿道炎を起すこともあるが、これは固より淋病ではないのだから、決して同一視すべきものではないのである、さて、淋病の恐るべきことは上に述た如くであつて、更にその實例を舉れば斯ういふ一場の慘劇もある、曾て十一歲の少女がある不良なる男子の暴行に逢ふて淋病に感染したのであつたが、僅か二三

日の後にこの憐れなる少女は、多發性關節炎を發し、幾ばくもなく更に左右兩側の肋膜炎を續發したそうである、又た淋病の膿汁が眼中に入つて失明の人となつたり、罪なき嬰兒を生涯盲目たらしむるなどは、實に悲慘の極ではあるまいか、ホルネル氏の統計に據ると盲目者百人中の七十九人は、全く眼淋毒の結果であるとのよであつて、それに亦淋病が家庭に及ぼす害毒を聞くと、男子が淋病に罹つて二十日ほど經つと、その妻は放尿に疼痛、出血、排膿があり、更に一週間の後には、生後九ヶ月の幼女も亦外陰部が爛れて排尿時には啼泣したといふとであるが、これ、皆男子の膿汁の觸接に原因したわけで、實に覿面な現象と云ねばならぬ殊に一たび女子に感染せんか、前述の諸病を起しヒステリーの原因をなして精神變鬱し、加ふるに不姙症を釀して家庭の圓滿を缺き、落寞たる境涯に一生を終らしむるに至るのである、ケーレル氏が實驗した所によると、不姙症の夫婦九十六人の中で二十九人の男子は、淋疾のために精蟲缺乏症を來したものであつたそい、だこれで見ると偶然に子なきに至るなどゝは、毛頭言へた義理ではないのである

▲淋病患者の注意　それで、淋病患者の是非心得てゐんければならぬのは、よく春秋の時候の變り目とか、若くは一年に一度起るとかいふのは、決して癒つてゐたのではなくて、つまり潜伏してをつたものが、時々發作するに止まるといふとである、素人考へでは膿汁さへ出なくなれば癒つたものゝやうに思ふが、それは淺墓な了簡である、膿汁が少くなると尿と一所に流れ出てそれと辨別はつかぬが、尿を檢査すると明らかに膿汁の浮てゐるのが見えるのである、それから攝生上の注意としては、酒、刺戟性の食物、及び交接の宜しからぬはいふまでもないとだが、人の氣つかぬとて大いに惡いのは運動である、副睾丸炎など惹起すのは、多くは運動の結果である、そして亦多くの場合には入浴も感心したものではない、それに世間では淋病に罹つたからとて態

く溫泉行などする人のあるのは、實に笑ふべきの至りである、斯らいふ風で、實際の療養法と素人考とは大いな徑庭がある譯ゆゑ、總て醫師の指圖によつて遣つていくとは尤も必要であるが、獨逸のミュインヘン大學で花柳病患者に一枚づゝ與へるところの心得書は、誠に至れり盡せりで、患者のためには實に至大の利益あるものであるから、今その淋病患者に就ての注意の、主要なる部分を抄譯して見やう

（一）●成だけ尖端の鈍い注射器と、提睾帶とを買ひなさい、そして提睾帶は、必ず淋病の全經過中吊つておかねばならぬ

（二）●醫師の與れた藥液を、一日に少なくとも三回、尿道に注射しなさい、但し注射時に激しき疼痛を覺えた時は、速かに中止して主治醫のところへ申出なさい、そして注射の際にはその前に放尿して、注射器を尿道にしツくりと充がひ、藥液を徐々に注入するのであつて、先づ注射した藥液は直に口外へ流出せしめ、次に再び復た藥液を注入し、さて後に、親指と中指とで尿道口を塞いで、藥液は少なくとも五分間、尿道内にとゞまらしめる必要がある

（三）●各注射後は、局部又は手を、藥若くは石鹼を以て、十分に洗いなさい

（四）●淋病の經過中には、屢ば前尿道炎が後尿道へ移行することがある、その場合には直に注射を中止して、醫者の洗滌を請ふべきもので、決して自ら洗ふとはならぬのである、そしてその後尿道へ移行したとを何うして覺るかといふと、尿を檢ればすぐ分るので、即ち毎日朝起ると直ちに二個の極清潔に洗ふた壜に放尿する、中にはその一部分を乙にはその殘餘の一部分を、といふ風にしわけるので、乙の尿は即ち膀胱から來たものである、て、乙のが若し甲と同樣に混濁つてゐたらばそれは全く後尿道に移行した證據である

（五）●淋疾が急性の間は、極僅かな麥酒の外は飲ではならぬのである、飲料としては、先づ炭酸水などを用ひるがよからう（これは獨逸の樣に日々ビー

ルを澤山飲む國故許してあるので矢張飲まぬ方が宜しい)

(六)● 淋疾の後期となれば、一定の麥酒は用ひても差支はないが氣長くゆる／＼とその量を增してゆくので、若し一時に多量を用ひたらば、非常に病勢が劇甚しくなる恐がある、また過度の運動、即ち舞踏、乘馬、擊劍などは、副睾丸炎を惹起すものと心得て、斷じてこれを止めねばならぬ、副睾丸炎は淋疾經過中は、何時も來るものだから、尤も用心せねばならぬのである

(七)● 淋病の膿汁は、目に來れば激しき焮衝をおこすものである

(八)● 一度淋疾に罹つた者は、全然治癒する迄は交接の愼むべきとは、言ふ迄もないが、その全癒といふのは、醫師がしば／＼顯微鏡檢査の結果、これを宣告した場合を意味するのである

(九)● 癒さずに放任ておいて淋疾を惹起す疾患の内には、尿道の狹窄、諸種の神經症、陰萎など頗る悲しむべき現象を來すのである

淋病ばかりで、意外に長くなつたが、次には軟性下疳から黴毒に說及ぼすとしやう

▲軟性下疳 俗に橫痃、疳瘡といふてをる疾病であつて、皮膚粘膜に發生ずる潰瘍で、重に陰部に生ずるものだから、黴毒とばかり思つて、その方の治療をするゆゑ、益す大きくなつて、疼痛が劇甚なり、龜頭包皮が腫脹てくる、併しこの病原は千八百八十九年にヅツクレイ氏が發見した一種の桿菌で、黴毒とは質が似ながらも特殊の性狀をもつてゐる病だから、十分に適當の療法を加へさへすれば、さして患ふべきものではない、傳染の機會は他の花柳病と同じく、その最も多くは交接であつて、殊に陰部に創傷なんかある時は尤も傳染し易きもので、そして交接の際創傷などを生じてそれから感染するともある、それから、接吻、患者の使用した飲食器、手巾なども傳染の媒介となるのである、それで、この病氣の症狀はといふと 先づ陰部に小疳が出來て、膿

を生じ、痛みを感じ、傷は一日の内に非常に擴がることもある、これに續いて横痃が出來、鼠蹊部の淋巴腺が脹れ痛み、皮膚が紅くなつて膿をもち、切開せねばならぬやうになるのである、併しこれとても早く手當をしたなら膿さぬ内にひかしてしまふことも出來るのである、こゝで大いに注意せんければならぬのは世人が横痃に對する見解の間違つてゐることであつて、俗には横痃をひかせば病毒が他へ及ぼすなどゝいつて放任ておくのが多いが、これは硬性下疳、即ち梅毒性の横痃と混同するからの謬想で、梅毒性のものは膿まず痛まず、自然にひいてしまつて、淋巴腺炎から全身に及ぼすのであるが、軟性下疳は局所にとゞまつて、治療さへすれば、早きは四五日で癒すことが出來、全身の諸臟器には何等の影響を及ぼすものではないのである

▲黴毒　この病氣の如何に忌はしく、如何に恐るべきものであるかは、故らに述るまでもなく世人の熟知する所であるが、その如何にして感染し、如何にして人體を侵害するものであるか、將たその病原の何ものなるかはあまり、よく知てをる人もないやうである、それは黴毒の病原といふのは、千八百八十四年にルストカルテン氏が檢出した桿菌であらうといふのが、現在での尤も據ところとすべき説であつて、傳染の方法は、外皮及び粘膜の上皮が缺損して、如何な輕微な創傷でも毒物がそこに止まることが出來た場合に、傳染するものであつて、決して健康な上皮を徹して侵入し得ないのである、また傳染の媒介は、例の、交接接吻、または陳痘などであつて、黴毒性の男子に接した女子は、やがてまたこれに接する幾多の男子へ病毒を移すのである、曾て佛國の一酒店に雇はれた淫賣婦は、毎夜二名若くは三名の遊客に接して、五ケ月間にその病毒を三百人に傳へ、また他の或る者は、四ケ月前から黴毒に罹りながら依然男子に接して、百人許りに傳染さしたといふ例もある、また接吻、これは日本では餘りないことだが、西洋ではよく遣ることだから、口唇、口腔に黴毒の占

居する時、来つてこれに接した唇は直に病毒を受るのである、余がナイセル先生に就て研究中、先生がある婦人の唇の黴毒を診察された時、日本には接吻の習慣がないから唇の黴毒が少なくて誠に結構だが、何うも此地ではその趣味を棄るとが出來ないで困つたものだと云れたので一同大笑ひとなつたとがあつたが、余が一昨年帰朝して開業以來、唇の黴毒を實驗したのは僅に二人に止まるのである、次に種痘「これは今では余りその危險もないやうである、さて、亦黴毒は間接にも感染するものゆゑ、酒盃、茶碗、楊枝、煙管などに就ても大いに注意せねばならぬのであるが茲に一つ奇體な例がある、一人の乳母が黴毒の小兒に乳を呑せて、直く跡で外の小兒にも呑したところ、その小兒は忽ち病毒を受たが、肝腎の乳母はホンの取次にとゞまつて自分は何事もなかつたさうである、これは專門家からいへばその第の道理があつて、別段訝しむべきとではないが、感染の道筋の一異例として、お話するのである

▲黴毒の三期　さて黴毒はすべて三期に分たれてゐる、先づ病毒を感受るのは、最も長きは四十二日、最も短きは十日、そして中數は二十四日としたものであつた、その感受した局部には疼痛のたき硬結が出來るのである、この時には早や病毒が全身に瀰漫つてゐるわけで、硬結が出來て間もなくその周圍の淋巴腺が腫脹て來る、即ち陰部であると鼠蹊淋巴腺が腫れて横痃となるのであるが、この横痃は前項にも述た如く、この硬結の出來る場所と形とは軟性下疳(疳瘡)に酷似て誠に紛らはしいが、その著異のある著明な點は、硬くて疼痛が少ないとであつて、それ故に軟性下疳に對して硬性下疳といふ名稱がある、で、硬結が大きくなつても疼痛がなく、また時としてはやゝ疼痛を感じるとがあつても、さして苦痛などいふ程でないから、軟性下疳よりはズッと輕いかといふと、決して然うではない、これが即ち黴毒の第一期であるが、次には、黴毒が引つて四十日位で三四日間か繼續し、同時に全身の皮膚粘膜に發疹

して、頭痛、咽喉炎、又が骨關節及び筋肉等に甚い疼痛を覺えて、脫毛することも多い、この時期を第二期黴毒と稱するのであつて、その際によく十分に醫療を施したなら根治することが出來るが、若しこの症候が輕快なために油斷して療養を怠つた時には、第三期に移行して何時再發するやも圖られず、病毒がその惡辣な猛威を逞しうしてからに、皮膚粘膜を侵せば潰瘍が出來、眼を冒せば失明となり、鼻にゆけば鼻を落し、食道、胃を襲へば食物を嚥下することが出來なくなり、咽頭、喉頭であれで聲が出なくなり、肺臟、心臟であれば謂ふ迄もなく危險の症候を來すので、その他、神經系を冒されると發狂し、腦であると生命を奪らるゝなど實に慘憺たる結果を見るのである、殊にその病毒を可憐しき妻に傳へ、可愛き子に遺し、花の顏を傷ひ健やかなる軀をいためしめ、汎く世に害毒を流すに至つては、悲痛まことに言ふに忍びざるものがあるのである、統計の示すところによると、母のみが黴毒である時は胎兒の病氣に罹るものが百人の内に八十四人、死亡するのが六十人、また兩親が共に黴毒である時は胎兒の病氣するのが九十二人、死亡が六十八人といふことである、それでまた黴毒感染後と受精時と間がなければないだけ症狀が重いのである、だから通常屢ば流產をした後に早產となり、その後に黴毒性の諸症を具へた兒を生み、初生兒は產後數日で斃れて、更にその後に遺傳梅毒に罹つた兒が出來て、それが漸く生命を取留るといふ事實を見るのであつて、隨分例外もあるが、大體はかういふ案配式に病毒がだん／＼薄れてゆくのである、それは扨おき、其の如くわが身を壞ひわが子に禍するこの病氣の、いかに恐るべきものであるかゞ分つた以上は、體裁がわるいとか羞耻しいとかいふことは止めにして、その第二期から第三期に移らぬ先に、思切つて適法の醫療を受ねばならぬのであるとは、敢て架說するの必要がないわけである

▲個人及び社會　花柳病の症候、及びその治療上の

注意は、大凡以上述來つた如くてある 、その豫防法としては、謂ふまでもなく怪しげな交接を避るのが萬全の策てはあるが、社會の道德觀念が全體に發達して、自覺的にそれに接近するとを欲せざるやうにならぬ限りは、人情として避得べからざる弱點であるかち、最初にお話した如く公娼の存在は止を得ざる現象として、意見の根抵をそれにおいて、聊かお話して見やうかとおもふ、尤も往々公娼を增せば花柳病も殖ゑなどゝいふ僻說を唱へる者もあつて、露國大學の某教授の如きもその一人であるが、論より證據、英國でも公娼を許さないで總てが密賣淫である結果として、花柳病の蔓延が頗る甚だしく、現に佛國大學では病勢の激烈な黴毒を、英吉利黴毒と呼てゐる位である、そこで彼の不潔なる婦人に接近するとして、局部の接觸を成べく短時間ならしめるとが、第一に心得べき要件であつて、飲酒後の交接は大いに愼まなければならぬのである、何故かといふと、醉中は知覺が鈍くて射精が遅いものだから、

所謂接觸の時間が長く、從つて病毒感染の機會もおほいのである、而して事後の要件としては、直に放尿するのが最も必要で、次では陰部の洗滌、これは水でもいゝが、硝酸銀溶液を尿口に滴下して洗滌すれば尚確かである、それに就て想ひ及ぼされるのは歐洲の娼婦の、その邊の注意のいかにもよく行屆いてゐるとである、彼等は男子に接するに先だちて、よくその男子の陰部を檢査した上で同衾を許し、交接後には必ず相當の方法を以て洗滌する、こう手數が掛つてシチ面倒臭くつては誰が一夜の春を買ふものかと、日本では一笑に付するであらうが、流石に文明國の娼婦は豫防法が行屆いて間接に害毒の蔓延を防遏してゐるとは、實に尠なからぬのである、それから一種の豫防法として大和衣、小夜衣など内地で擬造したのもあり、又貴女の友なんかいつた樣な豫防法もあるが、これらは用ひるは無論用ひざるに優るとはいふものゝ、決して絶對に効力のあるものと思ふてはならぬのである、そこで尚一種の社會政

策として余の意見をいはうならば、政府において密賣淫を嚴禁し、公娼の檢黴を嚴重にすると同時に彼の醜業婦の取締をテキハキと勵行して、成うとなら二枚鑑札にでもしてからに、中流以上に病毒の傳播するヿを防ぐのが、最も適切なる急務であらうと思ふ、余が獨逸にゐた頃に斯ういふ話を聞いたヿがある、或る日本人が伯林停車場で一人の獨逸人からフト言葉を掛られたので、何か用事があるかと尋ねたところ、貴君は四五日前に斯々の女を買たでせう、いやお隱しには及ばぬ、實は拙者は刑事巡査であるが、何うもあの女は近來二三の男を取た形跡があるので、いよ〱然うとすれば鑑札を與へる必要があるから、お尋ねする次第であるとのヿにその日本人は始めて風流罪過を自白したといふ笑話であるが、彼地の制度は實によく行屆いたもので、さういふ場合には直にその女に鑑札を下渡して、その後は一週間に三度づゝ檢査をするが、決して課税をするのではない、だから下女、洗濯婦などが一轉して娼婦となるヿが多い譯で、病毒の豫防は從つて比較的に完全を得るのである、さて斯く直接的の注意が、個人的若くは社會的によく行屆いたとしても、前項にも述たとほり、間接傳染といふヿに就ても頗る注意を拂はんければならぬものがあるのである、手拭、扉などに病毒の附着してゐた場合に、知らず識らずの中にこれに感染するといふのは多々あるヿで、これは淋病の一例であるが、或る高官の人が東海道の汽車中でフト眼がわるくなつて、直ぐ醫師に診せると、これは紛れもない淋毒性の眼病であると答へた、そこで高官は烈火の如く憤つておれは年甲斐もない噂を世間で立らるゝ奴等とは聊か行狀を異にしてゐる積である、それに何ぞや淋毒性の眼病とは人を侮蔑するも甚しいと怒鳴りつけたが、何ぞ知らむ同室の外國婦人が淋病と見えて度々便所に起つた際に、病毒の附着た手で木扉に觸れてあつたのを、何氣なく跡から便所へゐツた時にまたそれに觸れてその手で知らずと眼をこすつたものだから、此結果を來した

のであつた、この外まだお話もあるが餘り長くなりますからこの話は先づ是丈にして置きましやう

●酒精の害

近時精酒の取締嚴重となりたるは之れに防腐劑を用ひ人體を害すにあり、雖然酒精は元來人體に善からず、今古川將學士の話を茲に紹介せん。

酒精の人畜に及ぼす作用は實に劇烈にして特り其身を亡ぼして夭死することあるのみならず遠く其害を子孫に傳へて人類の蕃殖を妨ぐものなり故に英米にては主として宗教の力を以て節酒會或は禁酒會を組織し我邦にて幼年者の禁酒は禁煙と共に問題となりたり、西洋の俚諺に酒客は水に溺れて死することあり蓋し水腫を發して夭死するの謂にして怪我抔も治ること遲く或は之が爲めに酒客譫語を誘發することとあり、酒精を腹中に納むれば温氣を感ずるが如きも其實驗温器は體温の下降を示すものなれば酩酊して雪路を辿るは死地に赴くと同一なり雪中行軍(明治三十五年一月三十三日青森)には本點に注意すべし、其他酒客は胃加答兒(酒客嘔吐)に惱み胃癌を發し易く肝には硬結症(酒客肝)を發し脂化すること屢々なること此に等し血管は「アテローマ」變性を呈して卒中の基因となることあり殊に素因あるものは極めて危險なり、全身の羸痩太だしく皮膚には酒渣鼻を發し四肢振盪して手書を妨げ酒客譫語をも發するものなり

以上は壯年に對する酒精中毒の一斑を示すものにして質疑には年の幼長云々とあれど唯に分量的の差にて即ち幼老は反應著しきに過ぎざれば別段項を改めて答解せざるも可なり

百藥の長と稱するも其實無益の長物たる酒を、縱令如何なる蠻民と雖も一種の嗜好品を宗教と共に仰がずと云ふことなきにもせよ……深く國民に注入せしむるの不利益を避くるには酒に重税を課し禁酒令を布き其他種々の手段あるべしと雖も皆な有効確實の名法と稱する能はざることそ是非なけれ黑燒問題も

亦同じ東京牛込區小川町某方に販賣せる「酒不可飲」と稱する賣藥部外品は生發坊(蝸龍)の黑焼なりと聞けども未だ検査したることなし云々



衛生雜話

醫學士　石原喜久太郎述

◎肺結核の話

先回は結核の統計の事に就きまして一寸記して置きましたが今回も一度また同じ病氣の事を述べましょう、併し、今度は

●肺結核はどうして起るものであるか

と云ふ點を述べます、此事に就きましても色々と學者の説が出て居りまするので、つまり、まだよく、十分、わかッてゐないのてあります、夫で、結核病の病原である所の結核菌が最初に人間の身體の内の何處に這入ッてゐて、そうして、どうして肺臓に入りて肺結核を起すかと云ふ問題に就きまして、は凡そ、次の四種の説があります。

(一)結核菌なるものが初めから空氣の呼吸によりて肺臓に達し、此處に肺結核を起すものであるとの説で御座りまして、即ち、空氣中に混合してゐる結核菌が、もとてあッて、是が呼吸と云ふ手段、途行に依ッて直に肺臓に這入ッて恐るべき肺病を起すのぢやと申すのであります、次に第二の説と致しましては

(二)前説とは大にちがいまして、結核菌が初め飲食物と混じてゐて、それが腸に参り、先づ其處らにくッついて、一ッ、病氣の場處を作くりそれから次に肺臓の方えと向つてゐて、肺結核を起すのであると申すのです、第一説は空氣中にいた結核菌がすく腸にゆくと云ふのですから大變に差異があります。

(三)第三の方は空氣中にいる結核菌が呼吸によりて這入ッてくるにしても、又、飲食物中にゐる結核菌

かやッてくるにしても、第一說や第二說に於ける如くすぐ肺臟や、すぐ腸やに來るのでなく、先づほかの場處にくッつき、それから肺臟にゆき肺病を起すと云ふ說

(四)第四說は人間が生れぬ前で、母のおなかの中にゐる時に既に病毒を受けてゐて、生れて後に肺病を起すと云ふ說であります。

右の四ッの說に就きましては、所々で、色々の試驗などを行ッて、或は種々の統計などをもッて、絶えず、からである、あゝであると主張せられて居りまする、例へば、

●結核菌が呼吸によッて這入ッて來るにしても、其の前に、どうして空氣に混じてゐるのであるか

と云ふ點に就きまして、夫は、肺結核患者の吐き出した痰の内には結核菌がゐる、此の痰が乾いて、粉末となッて空氣中に飛散し、之が呼吸につれて肺に入り肺病を起す原となるのであるとか、或は、それよりは一層有力なる原因は、肺結核患者の咳嗽であッて、此の咳嗽と共に肺臟から細かな痰末が出て來る、之が空氣に混ずる、夫を他人が呼吸につれて吸ひ込んで肺病を起すのであるとか云ッて、夫れ〳〵の試驗をやッた學者もあります。

●飲食物によりて腸に結核菌がくッつくと云ふ說

に於きましても、甞て、私が本誌に紹介して置きました如く、彼のベーリング氏のように、夫は、重に、牛乳に結核菌が含まれてゐて、乳兒が多く牛乳を飲むが爲めに、先づ結核が乳兒の腸にくッつき、後に至りて肺臟にきて肺病を起すのであると云ッて、其の論證を擧げたのもあります。

今前に述べましたる四種の說につきまして追々、贊成があッたり、反對もあッたり致しまして、何れに限りて正しいとかと云ふことは今日もとより定まッてはありません、言ひ換ふれは肺結核の起る道行はまだ未定である、しかしながらまだ考えて見ます

れば、必ず一筋ばかりでなければならぬとも云へまい、或は二筋も三筋も道路があッてよろしいかも知れません、が、しかしながら、斯樣な道筋を明かに研究することは、此病氣の豫防上に大層關係のあることであるから、どうかして、少しでも、これを研究して、不明の點を明白のものにしたいと云ッて、夫で、學者が色々な研究や試驗を致し、入りかわり、立ちかわり、異ッた說や、同じ說を繰り返へして、反對もし、贊成もして、常にかうだ、あゝだと、盛んに背き立てゝゐる次第であります。

先月の本誌にも一寸載せて置きました通り、核結の統計に於きましては肺臟の結核と、他の臟器の結核とを比較して見るのに、何國でも肺の結核の方が、數に於て多いのであります、是は明白であります、菌の途行は何れであらうとも肺結核の多い事は事實であります、呼吸によりて肺結核を起すものであると主張する者は此統計を以て自分の說を確かめようとしてゐるのもあります、このさきどう云ふ事に決着するか、それは學者の研究すべき點でありませう。

肺結核の起り方につきましてはまづざッと右の通り要點だけ申上げましたッもりでありますから今回は是で筆を擱めます。

（完）



質疑欄

●質問注意●●●　質問中診察せざれば回答し難きものは一切解答せず又答解に遲速あるは登載順に都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみなわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御通知の事●本誌の雜誌に登載する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす●總て急ぎの分は回答せず

質問者　神戸　一　會員

問　若し狂犬病に罹りたるときは大抵生命の無きもの丶樣に承りて居りますが何か良き治療法ありますまいか

答　ありますとも〳〵以前は治療法無き樣に誰れも

思ふて居りましたが醫學進歩に由り注射療治にて治療することが出來ます此の法はパストール接種法と申しなして能く此の病を治療することの出來るのは實に一大幸福でありますが其れ故若し犬に咬れましたときは狂犬病と否とに拘はらず速にパストールの接種を御受けなさい打ちやりて置きますと發病後二三四時間乃至三十時間で死にます小兒等は咬れてから大凡三週間位で發病するもので胴より上は早く發生するもので大體は五十日目位に發生するのが通例です此の接種液は少しも反應が無く苦痛がありませぬから小兒でも老人でも少しも嫌がるヿはありませぬ

質問者　在京會員一婦人

問　年齢三十五歲人の妻昨年出産前迄は月經正しからず一月位不足を感ずるくらいなりしを出産後は正しくなりしも本年に至り月經と月經との間に於て三日間位極少量に色黑みある褐色の月經樣のものを見ると儘これあり氣分は少しも變るヿなし併し腰の痛みを覺ゆるは平常の事に候之れは何かの病氣に候や子宮に異狀あるものにや其の後姙娠は出來ぬものにや伺上候

答　凡そ出産をする前には少しでも其の身體の障害になる病氣は取除かなければなりませぬあなたは出産前から月經もあまり正しくなく多少の異常があつた爲に御出産も充分な結果が見られなかつたのでありましよう其の後は毎月正しき月經を見るようになつたのは誠に結構なヿですが月經と月經との間に三日位は極少量の褐色の月經云々とあるのは多少の異常あるものと見ねばなりませぬ殊に平素腰の痛みを覺ゆるとのヿでありますから之れは矢張り子宮の關係から來るものが多いのであります姙娠の事ですが之れは右樣の病位にて姙娠の出來ぬものと斷定するはあまり心配に過ぎたもので力を落すヿはありませぬ兎に角産後は名ある婦人科醫に診察を乞はれたとのヿですが猶心ゆかせには婦人科の大家なる駿ヶ臺の濱田博士、大學の木下博士、麴町の楠博士等につきて充

分診察を乞はれ其の意見に從ひて充分攝養せらる可し。

質問者　山形　阿部某子

問　私事十年來より神經衰弱症同時に胃と腹の病を發し煩ひ候處只今は全快の期に至り候も未た身に寒さを感じ三伏の時節にも單衣を着する日數十五六日間に過ぎず風邪に罹る事夥しく困入り候に付豫防法（海水浴を除く）及び簡易なる藥劑御教授願上候

答　神經衰弱症とは神經の作用の上に起る病で御婦人等に多くあるヘステリーと稱するものと同じてありますこの病はお腹から丸が胸に上りてくる樣だとか呼吸が止まりそうだとか或は眼眩がする或は悲しくなるとか凡ての事が氣に向かぬとか頭が痛とか重とか頭が空虛になつた氣持がするとか記憶力が減ずるとか忍耐が渺くなるとか云ふ樣な病氣でありまず此の病氣は左樣に多くなかつたが世の中が進むに從ひだん／＼澤山になりて來ましたがこの病氣は何の爲めに增加するかと云へば譯言すれば此の病氣は精神の過勞から起るものです少年にありては教育の過度若くは教師があまり嚴格過ぎるとか大人にありては何か非常な事情（なかんづく家政の困難若しくは頑固なる舅姑を持ちたる妻女又は良人の素行の修まらざる等）に起因するもの多し男子にありては一事業の失敗不平政黨政治上宗教上學生にありては學資困難落第、若しき一源因を爲すので之れが病を重らすものはアルコールの亂用之れは充分に注意せなければなりませぬ又神經の移傳と云ふとが最もありまして血族の結婚は非常な關係を持ちて居ります此の神經衰弱症は身體が衰弱した爲めに起るのと傳染病後貧血或は腸胃病の後見受けます日本等では殊に腸胃病等は最も神經質に傾き易ひ源因になるだろうと思ひますされはあなたの御病氣も察するに腸胃病から起つた神經衰弱でしよう之の養生としては神經をなるべく使はぬようにし心配するとを成る可くさけて運動及び食事の時間を定めて新鮮の空氣を

呼吸するやうにし安眠をするとは神經を休める唯一の手段であります又處々に罹り易ひとの事ですが是れは冷水で拭ふて寒さに慣れる樣な工夫をするとを必要とします藥劑の事は醫師に任かせます只だ精神を休めて閑散に靜養せらることか最も必要であります。

質問者　靜岡　一　會　員

問　腹痛のときは如何な手當を致して宜しきや私事度々腹痛にて困り入り候間良法伺上候

答　腹痛には腹部の上の方即ち胃の部分が痛むものと下腹部に痛のあるものとあります胃部の痛みますものは之れを稱して胃痛又は胃痙攣と云ひまして非常にさし込むとがあります下腹即ち腸の部分が痛いのは腸が惡いのでありますから能く注意せませぬと腸加答兒赤痢の徴候でありますから下腹の部分を溫めるとに氣を付けなさい其れは溫石又は溫きこんにやく溫き飯又は鹽等布片に之を包み腹部にあてるなり又は腰湯もよろしし湯たんぽもよろしけれど栓確かならされば火燒するとあれば能く／＼注意せらるべしあまり腹痛烈しきときはモルヒネ劑を服用し若しくは注射をすれば忽ち治癒すると雖之等の療法は醫者のすることとて素人は爲さゞるを良しとす。

質問者　橫濱市　一　會　員

問　石炭酸及硼酸其の他の消毒藥の溶し方及効用等伺ひ上げ候

答　使用の目的に因りて溶解の度に相異あれども通例五十倍の石炭酸水は手を洗ひ創面を滌ぐに用ゆ吐瀉物屍體の消毒に用ゆるものは二十倍とす五十倍の硼酸水は創面に用ひて良し又目に用ひても差支なし昇汞は千倍若しくは五千倍の溶液となして用に供するを常とし石炭酸と同じ目的に用ゆるとを得れども金屬に觸るるときは忽ち之れを腐融せしむるが故に能く注意すべし昇汞ガーゼを造るには(グリスリン)四〇、〇蒸餾水一〇〇〇、〇の中に昇汞一、〇食鹽一〇〇、〇を溫したる溶液を以て製す其の他(アムモニヤ)は臭氣强き液にして氣付藥に用ゆ内服するに

はあらず。
（ヨードフォルム）は之れ又臭氣甚しき藥にして粉末又は結晶の儘用ひ屢々ヨウドホルムガーゼとして用ゐらる但し此の藥も石炭酸も多量に用ゆるときは中毒するとありと知るべし。

質問者　鹿兒島　一　會　員

問　二十二歳の女子糖尿病に罹り身體にはさしたる大害も覺えず每日學校に出勤いたし食物は普通の米飯にておかずたけは肉物間には少しばかり菓子や果物等食しますが差支なきものにや又右の病氣は不治の病に候や何か良き療法伺上候

答　此の病は糖分を排泄する病ですから尿の檢査は誠に必要の事です一體通常の人の尿の中にも多少の糖分は含みて居りますけれども此病になると殊に甚たしいのですから打捨て置くと身體が衰弱して營養不良に陷ります食物は務めて糖分の少なきものを撰ひ肉類や果物は差支ありませぬこの病氣は不治の病てはありませぬ猶詳細のとは來二月木村醫學士が本會にて同病に付き講話せられますから略します。

●宮廷錄事

皇孫の御誕生　本月三日皇太子殿下第三の皇子御誕生あらせられたり戰捷と云ひ御誕辰と云ひ我國光は實に千古に比ひなきことなり去九日御命名式を行はせられ宣仁と命ぜられ光宮と稱せらるゝ旨仰せ出されたり。天壤無窮帝國萬々歲

中外彙報

▲我治創法の要領　我近來の治創法は藥液を以て創傷を洗滌せざる爲め敵の傷者中往々創傷洗滌を切望し爲めに不安の念を抱くもの少なからざるに依り某軍醫部長は繃帶所野戰病院等に於て敵の傷者を收容したる節獨逸語等を解する者には軍醫より說明し安心せしめ來りたるも雙方語の通ぜざる場合の爲め左の露文を各所に頒ち敵の將校下士等に手術前必ず之を示すこととなしたりと云ふ其譯文は如左。

輓近日本の治創法は乾燥療法を主とし殊に銃砲創は其既に化膿に陷りたるもの或は非常に塵埃等の爲め汚染したる場合の外は決して藥液を以て洗滌せず唯に創口は勿論其周圍を拭ふに止め其上にガーゼを覆うて繃帶するなり是れ細菌學の進歩に基きたるものにして三十三年北清の事變來之を經驗し學理に一致し治癒の速なること從來の比にあらず元來銃砲彈は已に火力にて消毒せられ居るものなればなり又戰地にては救急の外決して手術せず從て拔丸も之を施さず之を本國に送り必要あれば充分完備せる手術の準備をなし之れを行ふなり我將校以下に對する固より然り決して勞を厭ひ煩を避くるが爲めにあらざるなり要は傷者の幸福を企圖するにあり尚詳細を知らんと欲する者は彼我言語を通ずるの機あらば其他の軍醫に說明を請はるべし又兵卒等談じ能はざる者あらば之を讀みたる者は其意を申聞せ安心せしめられよ

▲美音と肉食との關係　肉食殊に魚肉を多く食する國民中には美音の人稀なる由にて美聲少なく諾威人は最も多く魚肉を食するより唱歌者最も少なく瑞典人は穀類を多く食し美音家の最も多き國民なり鳥類にても肉食するものは啞聲を發し穀類を食する鳥は音樂の如き聲を發すと云ふ。

▲各國人の發育比較　歐洲某生物學者曰く動物壽命の長短は當さに體軀の大小と正比例をなすべしと今日歐米人と本邦人とを比較すれば其身長四と三との如く其命數は四十と三十との平均を得べし本邦人と雖ども幼年より少年時代に至るまでは決して彼れ歐洲人に一歩も讓らずして成長發達を遂ぐれども少年期間を過ぐれば漸次發育を停止し青年即ち壯丁の時代に至りては遙かに彼れ歐洲人に劣るに至るは左の統計上に於て證明するを得べし。

	幼年六歲身長平均	少年十五歲身長年均	青年二十歲身長平均
英國人	三尺四寸八分	五尺〇二分	五尺六寸三分
獨國人	三尺三寸九分	四尺八寸五分	五尺五寸二分
佛國人	三尺二寸六分	四尺九寸四分	五尺四寸三分
露國人	三尺三寸五分	五尺〇三分	五尺五寸八分
日本人	三尺九寸六分	五尺一寸五分	五尺一寸七分
支那人	三尺四寸九分	五尺一寸二分	五尺三寸七分

蓋し本邦人は室内に於て座すること舉動不活潑即運動不足衣服の不適滋養分の攝取如何は大に關係あるべしと某生物學者は云へり人間は平均百四十歲の壽命を得べきものなるに生活上の惡習慣により短命を來すものなりと說けり

▲疱瘡流行の兆　去る三日神戸港碇泊の英國汽船内より三名の痘瘡患者を出したる以來山口縣豐浦郡、福岡縣築上郡、長崎縣上縣郡等に於て點々同病發生の由を内務省へ報じ來れるが昨年は對岸の韓國に於て痘瘡の大流行ありたることなれば其餘毒今尚ほ撲滅に至らずして同國を經て入港する船舶によりて輸入せらるゝは睹易き道理なれば本年は我國に幾分の同病流行を見るに至らんも知るべからずといふ。

▲赤十字社の救護力　赤十字社が今日迄戰地に派遣せる救護班は總計二十五個即ち醫員五十人調劑員廿五人看護人長五十人看護人五百人にして又陸軍病院船十一隻に乘組み專ら患者航送の任務に服しつゝある救護班も目下二十五個此人員六百五十名なり此外東京、仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本、弘前、金澤、姫路、善通寺、小倉、松山の各豫備病院及各分院に働きつゝあるものは實に七十二個救護班千八百七十二人にして内外水陸に於て同社監督の下に救護に從事せるものは總計三千五百名に上ると云ふ

▲春季種痘の勵行　過般來長崎、福岡、愛媛縣下等露國人の出入せる地方に於ては天然痘豫防の爲め種痘を實施し居れるが昨今各地方に往々該患者發生の摸様あるにより其筋に於ては各地方廳に内訓し春季種痘を勵行せしむる方針なりと。

▲實扶的里亞の流行　實扶的里亞病は目下流行の兆あれば警視廳第三部にては豫防方法を研究中なるが去る一月一日より十日までに市内の該病患者は既に三十四人ありしとは油斷大敵。

▲驅鼠船設置　内務省衞生局にてはペスト豫防の必要上驅鼠船設置の計畫あり此事議會を通過したる上は神戸、横濱、長崎各海港檢疫所に附屬せしむる筈なりと云ふ。

▲市施療病院設立に關する委員會　尾崎市長は過日來市施療病院設立に關する委員として山根正次、松田秀雄、江崎禮二、野々山幸吉、神鞭知常の五氏を選任し同委員諸氏は去十五日午後一時より市參事會室に相會し尾崎市長も臨席して先づ病院敷地選定の

件に付内議したり。

▲出征艦隊衛生好良　最近調査、出征艦隊各部隊の休業患者百分率は左の如しと云ふ。

第一艦隊艇隊	〇、四六
第二艦隊艇隊	〇、二四
第三艦隊艇隊	〇、六九
特別船舶部隊	一、〇三

右は十二月十一日より同月十七日に至る間の調査にして此週間傳染病患者は赤痢一名の發生ありしのみ。

▲暹羅のペスト　盤谷領事十二月廿四日發電・・・暹羅國衛生局の報告に依れば盤谷土人中にペスト病發生し本月十六日以來八名死亡せり其蔓延を防ぐ爲め嚴重なる方法を講じつゝあり。

▲窒息　千葉縣安房郡日濱村靑木生當時横濱三吉町二の一七大胡銀藏方丸野兼松方同居船夫早川豐吉は十七日銀藏の所有石炭船に乗り込み同夜大岡川筋吉濱橋際郵船會社石炭庫前に繋留しコークスを焚きたるまゝ寢に就きしが四方密閉しありし爲め窒息して死したり。

大日本婦人衛生會記事

●本會新年會

一月十四日(第二土曜日)午後一時半より神田區一ツ橋通共立女子職業學校内に於て會員相互の禮を兼ね本會の新年會を擧行せり濱尾副會長には新年の辭を述べられ其より松林伯鶴の講談に移り昨年七月第二軍に從軍して深く戰地に浸入し充分の戰況を視察して同年十月歸京せりとて日露戰爭中橘中佐(周太氏)の己一人の安逸を謀らずして苦樂を士卒と共にし能く部下を督勵せし等の逸話を講じ茲に一席終りて暫時休憩茶菓の接待あり再び第二席を開始し八月三十日中佐の奮戰勇壯遂に敵彈の爲め名譽の戰死を遂げられしことを熱心に講談し午後四時半散會を告ぐ當日の來會者は凡二百五十名にて役員には濱尾副

會長、高木鉄子、田村き代子、高橋孝子、緒方悦子、岡山とし子、中濱芳子、相馬陸子、羽田三緒子、松平芳子、濱田捨子、岸澄子、宮本樂子、三浦敏子、丹波貞子(出席順)の諸氏にして當日會長より左の通り寄附せられたり。

●●●●●

一金拾圓也　鍋島榮子

●傷病者への帽子寄附

金參圓五拾錢　新潟市古町通十二番地　阿部たい子
同　同所　阿部きく子
金五拾錢　牛込區新小川町三ノ十九　岩崎こく子
金壹圓　臺灣臺中醫院官舍　高木しゆん子
金壹圓　同所　久保田ぶん子
金五拾錢　新潟縣南蒲原郡本成寺村　廣川きん子
金壹圓　京都市上京區新烏丸夷川　石栗登勢子
金貳圓　淺草區猿若町一ノ廿七　岩田晴子
帽子五個　豐多摩郡下澁谷村二八六　菱田糸子



高崎支會報告

第二十八例會

十二月四日(日曜日)第二十八例會を高崎高等小學校内に開く午後二時開會第一席乾宗太郎君には「神經病豫防に就て」といふ演題にて該病の原因經過を詳述し後ち其豫防法を懇篤に述べられたり第二席深町荒雄君には「結核に就て」と云ふ題にて該病の原因經過及傳染の經路豫防方法等を通俗的に述べ八種傳染病に比較を取りて其恐るべきことを詳述せられ第三席藤崎清太郎君「看護學習得」其二と題し前と會の續き即ち病床日記記載方法に就き懇話せられたり時針四時を報ずるを以て爰に閉會を告ぐ此日出席の役員は

相澤　馬渡　齋藤　相川　秀島　高草木　稻垣
講師　關　龜井　深町荒雄君
仝　乾宗太郎君　藤崎清太郎君

因に記す十月例會の際藤崎清太郎君講演の趣旨は左の通りの由なれば茲に正誤す。

●藤崎清太郎君十月分演題

一產婆學及看護學を修得するは婦人の義務なり。
一其一席（一）演題の理由（二）流產と其注意

茨城支會報告

十二月例會

十二月十一日午後一時より例會を縣立水戶高等女學校に開く參會者四十餘名閉會は午後四時半なりき。

當日の講話等左の如し

一傳染病豫防法につきて　波多野醫學士
一讀書朗讀　小野幹事
一同　同
一會告　豐田副會長
一唱歌　金剛石

波多野醫學士には相變らず同支會の爲め熱心に盡力せられ其講話の如きもいと親切に是有益なるものなりしかは會員はいつも滿足を表しつゝありと云ふ。

山形支會報告

十二月例會

十二月十日午後一時より當市女子師範學校に於て例會を開く田中會長岩本副會長を始め會員學生の來會者約百名古閑新島の兩氏出席せられ左の有益なる講話あり特に會員諸氏も傾聽せられし樣見受たけり四時散會す。

月經に就て　醫學士　古閑末熊君

米澤支會報告

十二月例會

十二月十一日第二日曜日松岬館に於て午後一時より例會を開き左の講話ありて四時散會せり出席講師左の如し

一家庭看護法　中條梅節君
一繃帶實習　猪股松三郎君

第四日曜日二十五日松岬館に於て午後一時より納會を兼ね例會を開く其順序出席講師左の如し

一感冒の注意　猪股松三郎君
一祝辭　關新太郎君
一落語　同

餘興　福引

出席講師には仁科、中條、加藤、關、猪股の諸師なりき

山形支會員の情報

前略同會に於ける乙種會員には多少の變動ありしもはや是等の動搖もすみ會はます〳〵盛んにて此頃は諸會の會長役員なども衞生會と親しく相成此ほど米澤にて發會せし奉公婦人會なども衞生會役員の多くは幹事を務め居り候次第にて相互に往復し本月の納會には顧問講師の諸氏を招待して餘興には福引なども催し奉公婦人會の上杉會長(安子)をも招待し盛んなる納會式をなせり又十一月中米澤出身のものにて佐土丸の難に出會ひたる人此程一寸と歸國せられしかば衞生會にて夜會を催し談話を乞ひしに夜會にもかゝわらず會員の外三百餘名も出席者ありて非常なる盛會にて候ひしよし猪股幹事の書信中に見へたり。

●新潟支會の恤兵慈善演技會

同支會に於ては奉公恤兵の趣旨に基き昨年十一月の役員會に於て旅順陥落の曉には演技會を催し其純益金を恤兵并に軍人家族救護費に充てんことを決議し爾來準備中なりしが愈々今般旅順口開城となりしに付別紙の趣意を以て廣く有志に圖り去る一月十三日午後五時より同十四日午後零時半及同日午後六時同市なる國粹座に於て開會各出演者の援助に依りて役員賛成員等は日夜奔走して盛大なる演技會を舉行せりといふ

此演技會の爲め北越鐵道安進社越佐汽船等の各社は何れも往復共試割引をなして參會の便を圖り入場券は招待券優待券及普通入場券(青及赤)の四種とし優待券は本趣旨を賛し金壹圓以上の寄附者に頒ち青券は五十錢以上赤券は二十錢以上の寄附者に頒つことゝなせしといふ出演者は何れも同市に於ける錚々たる教育家にして是全く義勇奉公の至

誠より熱心に同會を援助せられたる空前の美挙にして役員の勞苦もさこそと想像するに餘りあり未だ當日の盛況を詳かにせずと云へども充分其目的を貫徹したるものなるべし

●恤兵慈善演技會趣意書

今や我忠勇義烈なる數十万の全貔は遠く滿洲の荒野に轉戰し具さに艱苦を嘗め前古無比の功績を顯はすに至るは洵に我等國民の感激に堪へざる處なり此秋に當り我等帝國臣民たるもの豈飽食暖衣徒らに拱手して傍觀すべけんや茲に於てか本會は旅順陷落の捷報至るを期し奉公恤兵の事に從はんが爲篤志の諸彥に請ひ其獨得せられたる音樂上の技藝と親しく聽知せられたる征露戰況との出演を求め一は以て音樂の趣味を涵養し進んで愛國敵愾の心を發揚し一は以て出征軍人の忠勇義烈を表彰し之を國民の發氣に訴へ以て捷報に接し欣喜雀躍狂奔謳歌の間に處し敢て全腕國民の義務を忘却することなく或は彼の遼東の暑熱を凌ぎ正に滿洲の酷寒と戰ひ生命を羽毛の輕きに比して砲煙彈雨の間に馳驅せる戰士を賑恤し或は我愛兒を送り我良人に別れ時に貧困病苦に襲はれ甘んじて此の未曾有の國難の犧牲となれる軍人家族を慰藉するの務を盡さんと欲す伏して冀くは仁愛厚義なる大方の諸君子は奮つて本會の擧を賛し來つて全心協力の榮を賜はらん事を

尙本會出演の諸彥は各自繁劇なる要職に在りて公開の席に演技せらるゝ如き固より其人にあらざれとも本會の趣意を賛し特に本會の請を容れて出演せらるゝに至れるものなれば來場諸君に於ても亦特に此意を諒せられ嚴肅以て靜聽せられむ事本會の切望する所なり

明治三十七年十月

發起者　新潟市　婦人衛生慈善會

出演者（イロハ順）

新潟市工藝女學校音樂教師　殿尾純
高田師範學校音樂教師　早川喜左衛門
米國人　カルテス
仝　カルテス夫人
土木監督署員　河野孝敬
新潟縣高等女學校音樂教師　高井德造
長岡女子師範學校音樂教師　杭村くに子
新潟縣高等女學校國語教師　山ノ井景雄
新潟縣師範學校監學教師　山崎維新
仝音樂教師　青木兒
新潟市工藝女學校音樂教師　青木武子
土木監督署員　青木辰藏
柏崎高等女學校音樂教師　宮島愼三郎
新潟縣師範學校内　晴樂會員
外　男女有志

賛成者姓名（イロハ順）

五十嵐佐濟　池田庄平　長谷川一詮　新妻駒五郎　本田伊平　小澤七三郎　若杉きく子　金子庄作　桂民衛　横山太平　武市啓　田代亮介　高橋助七　中隈仙五郎　野口謙造　久保山右作　養德婦人會

稻田甫吉　長谷川勝次郎　林部治　新潟新聞社　木間新作　大橋庄吉　笠井信一　神戸豐　加藤勝潤　高岡忠稙　多田稔　高橋辰五郎　田村みちよ子　中村肖　野上知哲　山下貞實　萬千野定之助

池原泰造　萩野左門　長谷川せん子　新潟日報社　鳥居錦次郎　王女會　海沼英祐　鍵富三作　加藤こう子　田中秀夫　多田綱宏　高橋新平　土田識雄　中山忠次郎　久我正庸　山口政治　松野なほ子

今泉錦次郎（東北日報社内）　長谷川寶治　母の會　堀内恭之進　小風知依　若杉喜三郎　加藤興之吉　鍵富岩三郎　吉田辰治郎　田宮從善　竹山屯　高橋助次　土田とめじ子　長濱省作　倉田久三郎　山崎利吉　婦人教育會

福永兵太郎　佛教婦人教會　古閑定　小出喜七郎
近藤醫之助　江口照造　阿部致　荒川オ二
荒川柳軒　阿部玄四郎　青山松藏　荒川きく子
阿部てい子　愛國婦人會　朝日會　佐柳藤太
坂本有隣　齋藤喜十郎　杉村萬藏　齋藤巳三郎
櫻井市一　澤田敬毅　北見東一郎　木ノ井喜玄
湯原元作　新保新造　清水中四郎　清水禎三郎
清水良作　平松遮那一郎　諸星茂吉　森田利房
關彦太郎　鈴木長八　（第二版）

尙演技會執行事項は左の順序表を配布せり

恤兵慈善演技會執行事項概畧

一、開會の辭
二、實戰談……（第十六聯隊並 第三十聯隊將校諸君）
三、活人畫……（圖案者）山崎維新君
　　鶴が岡
四、ヴアヰオリン獨奏……早川喜左衞門君
　　エルフイシ、ガボツテ　（伴奏）宮島愼三郎君
五、二部合唱……（カルテス氏 仝令夫人）
　　ザ、スター、スペングルド、バンナー
六、仕舞……某令孃
　　杜若
　　羽衣　（地謡）（河野孝敬君 青木辰藏君 外數名）
七、柴笛……幾尾純君
　　詩吟
八、山の音……（和洋調和樂）
　　ヴアヰオリン……早川喜左衞門君
　　ヒヤノ……宮島愼三郎君
九、活人畫……（圖案者）山崎維新君
　　足柄山の月

十、單音唱歌……有志諸君
　　甲、他鄕の月
　　乙、起てや同胞
十一、獨唱……青木兒君
　　甲、ひとり
　　乙、樂しき農民
十二、二部合唱……（青木兒君 幾尾純君）
　　甲、夢
　　乙、船出
十三、ヴアヰオリン獨奏……早川喜左衞門君
　　ホツポリー　（伴奏）宮島愼三郎君
十四、活人畫……（圖案者）山崎維新君
　　吉井少尉
十五、單音唱歌……唱樂會員諸君
　　甲、未定
　　乙、征夷歌
十六、ヴアヰオリン合奏……（高井德造君 未定）
　　ヒヤノ
十七、四部合唱……（指揮者）青木兒君
　　櫻井驛　男女有志諸君
十八、ヒヤノ獨彈……宮島愼三郎君
　　ソナタ
十九、ヴアヰオリン……山井景建君
　　甲、セレネード（夜間戸外の歌）
　　乙、アンダンテー（溫和速度の曲）
二十、獨唱……宮島愼三郎君
　　海底の眠　（伴奏）早川喜左衞門君
廿一、活人畫……（圖案者）山崎維新君
　　軍國婦人

廿二、艶色（和洋調和楽）
ヴァヰオリン……早川喜左衛門君
ヒヤノ……宮島猶三郎君
廿三、四部合唱……（指揮者）吉本兒君
薩摩潟　男女有志諸君
一、山田木定……植村くに子君
以上

[illegible]

●本會入會者

○事務所へ申込
●和歌山縣師範學校女子部　通常會員　竹野菊江子
●北海道増毛町大字弁天町　通常會員　戸來きく子
●本郷區天神下同朋町十二　通常會員　佐橋せう子
●麹町區飯田町五ノ三十六　通常會員　久保とも子

○麹町　三輪田眞佐子紹介
●日本橋區長谷川町十一　通常會員　岩佐　子

○本郷　和田英子紹介
●本郷區東片町四十四　通常會員　野口さん子

○米山幹成員紹介
●秋田縣小坂鑛山醫院内　●特別會員●　佐々木きぬ子
●秋田縣小坂鑛山醫院分院内　特別會員　河野りつ子

●茨城支會入會者

○樫山ます子紹介
●　通常會員　松本梅子

○豐田芙雄子紹介
●　通常會員　倉田末子

○岡部さと子紹介
●　通常會員　片岡はる子

●高崎支會入會者

○相川壽嫁子紹介
●群馬郡塚澤村大字飯塚　通常會員　後閑かつ子
●高崎市柳川町　通常會員　江積ていこ
●仝市本町百四十四　●特別會員●　小林ゆき子
●仝市九藏町二十四　特別會員　小澤みね子
●仝市本町八　通常會員　横山しげ子
●仝市本町百三十一　通常會員　天利いし子
●仝市本町百三十六　通常會員　小保方茂代子
●仝市本町十七　通常會員　相場わし子
●仝市田町八十九　通常會員　小澤てる子
●仝市住吉町二　通常會員　吉野なほ子
●仝市連雀町燈※署官舎　通常會員　樋口操子
●仝市中紺屋町　通常會員　萩原たつ子

○金子はる子紹介
●仝市本町　通常會員　野中八重子

○瀬下たけ子紹介
●仝市鍛冶町　通常會員　高野とも子

○三橋ひろ子紹介
●仝市宮本町四十九　通常會員　服部　こと子
●仝市柳川町六十四　通常會員　上宮　つね子
○小保方茂代子紹介
●仝市本町百四十　通常會員　小澤　きん子
●仝市本町　特別會員　三井田婦美子
○相川はま子紹介
●仝市嘉多町三十八　通常會員　小倉　みつ子
●仝市本町百二十二　通常會員　小竿　けん子
●埼玉縣浦和女學校寄宿舍內　通常會員　長井　とよ子
●高崎市柳川町八十五　特別會員　秋元　はつ子
○吉野なほ子紹介
●仝市嘉多町十一　通常會員　小島　きん子
○小山いく子紹介
●仝市九蔵町五十四　特別會員　落合　きよ子
●仝市九蔵町五十六　通常會員　志村　その子
●仝市嘉多町十　通常會員　落合　きみ子
●仝市田町二十八　通常會員　松村　りう子
○相川とみ子紹介
●仝市赤坂町　通常會員　上和田てる子
○星野きよ子紹介
●仝市田町　通常會員　小川　みよ子
○土谷金次君紹介
●群馬縣北甘樂郡高瀬村　通常會員　齋藤　孝子
○吉田千代子紹介

●仝市新紺屋町十二　通常會員　藤守　竹子
●仝市堰代町五　通常會員　小林　久子
●仝所　通常會員　吉田八重野子
●仝市相生町三　通常會員　細野　ぶん子

◎會員種類變更
●元通常會員　特別會員ニ改ム　相川　喜嫁子

◎新潟支會入會者
○古間幹事紹介
●仝市一番堀通七十三　特別會員　松本　かよ子
○事務所へ申込
●仝市一番堀通七十三　特別會員　高山　さち子

◎幹事推選
特別會員　若杉　きく子

◎米澤支會入會者
●米澤　甲種　山田　ちよう子
●仝　甲種　高橋　とき子
●仝　甲種　高梨　はるの子
●仝　甲種　針生　幸子
●仝　乙種　加藤　かつ子
●仝　乙種　沼澤　しん子
●仝　乙種　丸山　しげ子

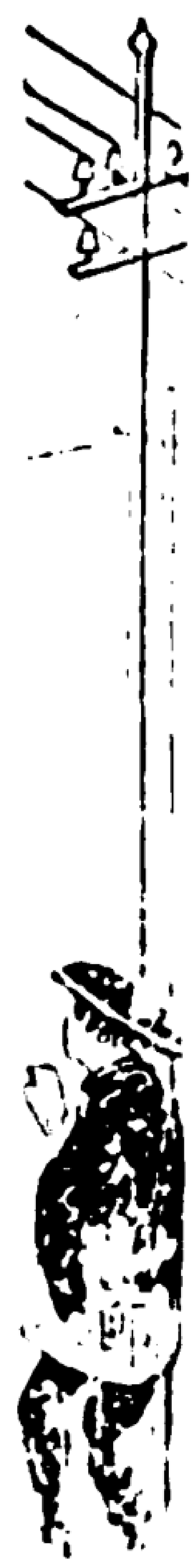
◎會員種類變更
●元甲種　乙種へ改ム　山根　のぶ子

弔詞

高崎支會々員細野發代子には昨年十二月病死せられたるの報に接し

本會は謹みて哀悼の意を表す

私立日本婦人衞生會



●轉居

▲會員諸姉御轉居の際は可成新舊兩所御記入事務所宛御一報相煩候

●府下千駄ヶ谷八幡前三七一へ　國島梅子
●岩手縣盛岡市內丸裁判所官舍へ　戸川多喜子
●小石川區小日向台町二ノ七へ　淺沼こまへ子
●牛込區東五軒町四十三へ　柿澤壽子
●麻布區今井町三十九へ　吉原かや子
●本郷區西片町十、とノ四へ　越智雪子
●下谷區黑門町二十三へ　宇田川利子
●四谷區荒木町廿七、ぬ十二へ　伊藤こう子
●牛込區横寺町五十八へ　杉山わか子
●麹町區飯田町四ノ二十五へ　武笠美以子
●廣島縣江田島兵學校官舍へ　富岡婦美子
●山口縣豐浦郡王司村字宇部へ　關野秀子
●北海道[illegible]丁目[illegible]へ　清水方　宮島梅子
●本郷區駒込追分町二十一へ　深井てる子
●本郷區根津宮永町二十五へ　櫻井みち子
●[illegible]國[illegible]山[illegible]道社宅へ　富田たま子
●下野國日光山內唯心院へ　松下貞子
●芝區高輪南町へ　男爵夫人　岩崎早苗子
●仙臺市元鍛冶町一へ　伊　よし子
●小石川區駒込病院內へ　石橋はや子
●芝區西久保[illegible]町二十四へ　佐伯すみ子
●肥後國大村伊勢町三八一へ　佐土原稻子
●長崎縣南高來郡島原村六三四へ　田浦龜子
●高崎支會々員へ變更　三澤豐子
●東京帝國大學病院三浦內科新室へ　諏訪なみ子

●會員改姓

●東京　佐山絹子改メ　高濱絹子
●北海道　清水梅子改メ　宮島梅子



●交換寄贈雜誌（十二月分）

●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　日本赤十字發行所
●日本婦人　府下澁谷村字常磐松　帝國婦人協會
●日本橋區衞生協會雜誌　日本橋區蠣殼町二ノ二　日本橋區衞生協會
●日本皮革時報　本所區表町五七　益世社
●新潟日報　新潟市西堀通三番町　新潟日報社

●北海實業新報　北海道札幌區北二條東三丁目　北海實業新報社
●統計集誌　京橋區山城町六　東京統計協會
●東京教育雜誌　神田區錦町一ノ二十　東京教育雜誌發行所
●東京市教育會雜誌　東京市役所內　東京市教育會
●をんな　麹町區下二番町三十七　大日本女學會
●大坂醫學會雜誌　大坂東區淡路町一ノ六　大坂醫學會
●家庭新聞　熊本市北新坪井町　家庭新聞社
●割烹新聞　下谷區上根岸町　家庭割烹實習會
●學校新聞　福井市毛矢町五四　學校新聞社
●家庭雜誌　麹町區中六番町十　由分社
●萬問答誌　茨城縣筑波郡板橋村　萬問答社
●大日本婦人教育會雜誌　麹町區永田町一ノ十九　大日本婦人教育會
●大日本耳鼻咽喉科會々報　東京醫科大學耳鼻咽喉科醫局內　大日本耳鼻咽喉科會
●大日本私立衞生會雜誌　京橋區宗十郎町七　大日本私立衞生會
●體育　府下荏原郡大井村　日本體育會
●通俗衞生　大坂西區土佐堀通　大坂私立衞生會
●牟婁新報　和歌山縣西牟婁郡田邊町　牟婁新報社
●藥學雜誌　牛込區上宮比町八　日本藥學會
●藥石新報　大坂西區江戸堀上通　藥石新報社
●藥業公論　府下內藤新宿北裏町　藥業公論社
●經濟新報　麹町區永田町二丁目　經濟新報編輯部
●京濱實業新報　神田區北神保町八　京濱實業新報社
●婦人世界　大坂南區鹽町通四丁目　浪華婦人會
●婦女新聞　牛込區東五軒町四一　婦女新聞社
●婦人と子ども　本郷區女子高等師範學校內　フレーベル會
●婦人　神戸市三ノ宮一丁目　婦人協會
●佛教婦人　東京巣鴨二二五五　家庭社編輯部
●福田會月報　麻布區笄町百三　福田會育兒院

●國家醫學會雜誌　本郷區富士町一　國家醫學會雜誌發行所
●工手の月　大坂北區西野田新家西の町番外　工手の月新聞社
●衞生報知　神戸市相生町一丁目　私立神戸市衞生會
●越佐教育雜誌　新潟市東仲通一番町　越佐教育雜誌社
●英學生　小石川區小日向臺町　東西社
●衞生新報　下谷區池之端仲町　衞生新報社
●愛國婦人　麹町區飯田町一丁目　愛國婦人發行所
●あかつき　埼玉縣埼玉郡越ヶ谷　曉社
●產科婦人科學雜誌　日本橋區濱町三ノ七　產科婦人科學會
●音樂新聞　大坂南心齋橋筋　音樂新聞社
●產婆學雜誌　日本橋區濱町三ノ七　日本產婆學協會
●躬行會叢誌　芝區三田綱町一　躬行會叢誌出版部
●兒童教育　神田區末廣町十　兒童新聞社
●神經學雜誌　小石川區駕籠町東京醫科大學精神學教室內　日本神經學會
●廣島衞生醫事月報　廣島市猫屋町　廣島衞生醫事月報社



會員諸姉に告ぐ

日露兩國の交砲火を以て相酬ゆるに至りてよりはやも十月あまりとはなりぬ。國運めでたくして戰はつねに我に利あれども其前途は尙はるかに遠し國をこぞつて共に力を致さむこと國民たるものゝつとめなれば國の爲め親をすて妻子をすてゝ進んで難にあたれる同胞の上を深く思ひやりて自らの力の及ぶかぎりはこれ等の人々の爲めに盡さむことはまた多く言葉を要せざる處なり然りながら世界に數多からぬ强大國を敵として戰ふことにしあれば一と度戰ふ每に我同胞の傷き斃るゝもの丶甚だしきは萬を以て數ふるに至らんこれが爲め本國に送らるゝ傷病者がいたでになやみて呻吟するさまのいかばかりかなさけなかるべき本會もかねてこれ等の人々の爲め慰の一品たりとも送らばやと思ひ居たる折柄近頃日本赤十字社にては病者に尤も必要なる帽子の夥しく不足せるよしを聞きければ是を寄送することは誠に本會の相等しき事業と思ひ早速臨時會を開きて評議すべかりしも至急を要するの際巳むなく役員會議にて種々評議の末本會基本金中より金貳百圓を出して同社へ寄附したり然りながら尙戰況の進むと共に傷病者も益々增加することなればこれ誠に九牛の一毛にも若かざるを思ゆればひろくこれを會員諸姉にはかり一個たりとも多くこれが不足を補はむと欲してゝに左の定めを設く希くは諸姉幸ひに多少の同情をよせられむ事を（つゞく）

一、本會の傷病者に對する帽子寄送は日本赤十字社本部とす

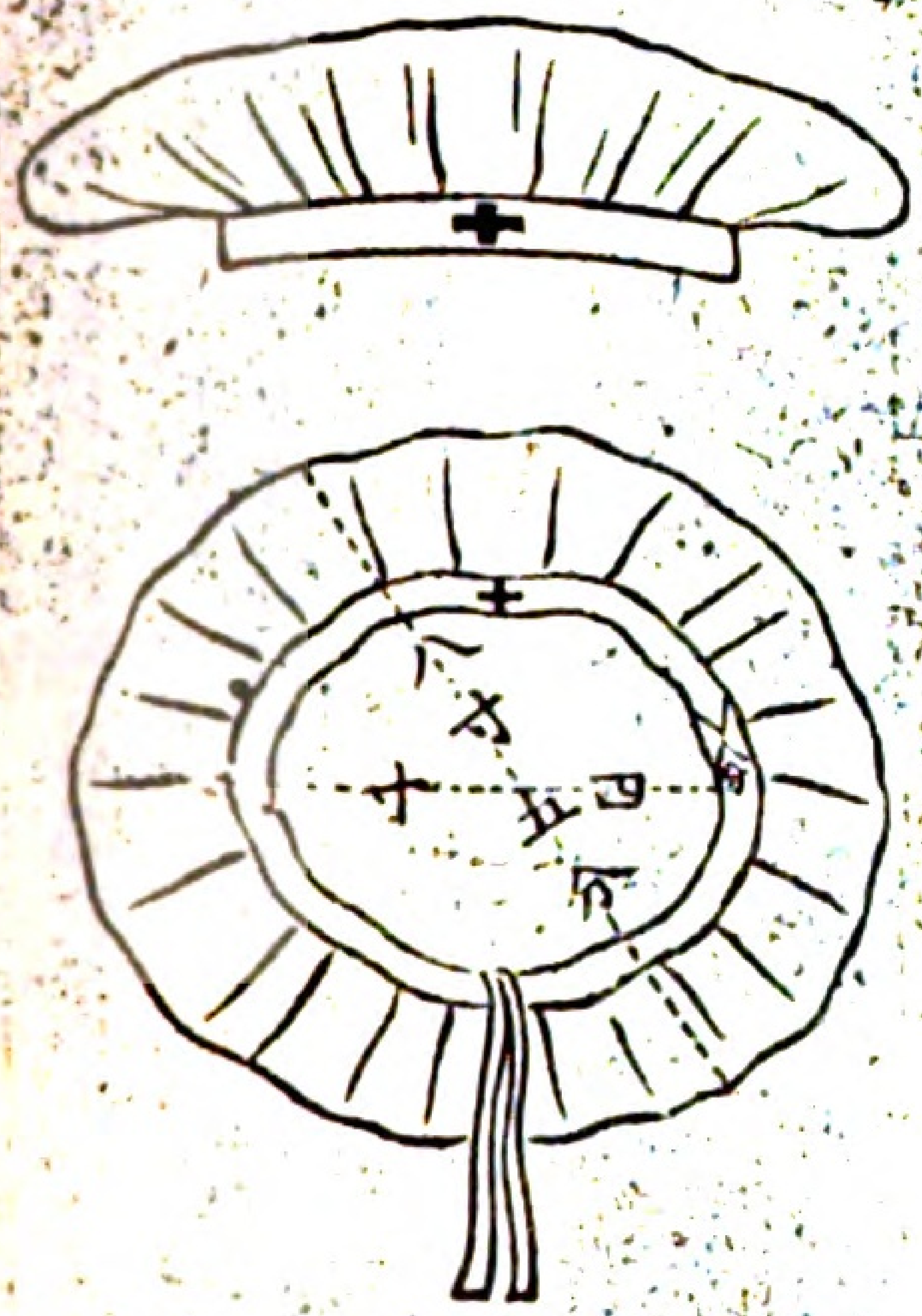
二、寄贈者は（現品、現金、）何れとも御隨意本會事務所（麴町區飯田町六町目三番地）迄御差出しあれば本會は直ちに之を取纏めて寄贈の運びをなす

三、寄贈の金品に對しては本會事務所より受領證を交附すべきも赤十字社よりの受領證は一と纏めにしたるものなれば一々交附せず

四、本會は戰爭終局まで此事業を繼續し何時にても多少に拘はらず其取扱を快諾す

五、寄送者諸姉の人名其他右に關する要用の件は本會雜誌を以て報告す

六、寄送の帽子は左の雛形により調製の事



調製代價は本フランチル綿フランチルの別により多少の相違はあれども凡廿錢以上卅五錢位なり

明治三十七年十一月

大日本婦人衛生會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章

（第三號）メッキ製拾二錢、送費六錢

（第二號）正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章

（第一號）七十錢（黒檜箱入 送費九錢）六十錢（桐箱入 送費六錢）

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らす御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すへしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料なも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麹町飯田橋通）宛振出あるべし又た價格表記通運便、何にても差支なし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈の事

本誌一部定價貳拾錢

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

東京市麹町區飯田町六丁目三番地
發行所　私立大日本婦人衛生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行人　山中篤三郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　渡邊智

明治三十八年一月二十五日印刷及發行（毎月一回二十日發行）
婦人衛生雜誌第百八拾二號

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場印刷